
音楽を奏でて

鶴岡俊和

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

音楽を奏でて

【Nコード】

N0183E

【作者名】

鶴岡俊和

【あらすじ】

地球上で最も機械文明が発展しているダイヤグラム大陸。そこは昔、機械技術の独占によって滅亡し、音楽によって復活した大陸だった。一度は機械がなくなったものの、人々の欲が機械を再び大陸に呼び戻してしまう。機械は今再び、人々に驚異をもたらそうとしていた。

第一章：壊れ始めた音楽

第一章 壊れ始めた音楽

いたるとこの壁にゼンマイ仕掛けが施された巨大なドーム型のホールには、自分たちの最先端の技術を自慢げに説明する高官たちが並び、高価なドレスに身を包んだ貴婦人たちがよく理解もしていない機械技術に舌鼓を打ちながら、名のある妻の座を狙おうと高官達に目を光らせている。あちこちに設置されたテーブルの上には豪華な料理が並べられているが、誰もそれに手を付ける様子はなく、給仕が運んでくるワイングラスばかりがあつという間に空になっていった。

ダイヤグラム大陸で最先端の機械技術を誇るここコントラスでは今、吹き抜けの巨大なホールの中で、過去の技術と現代の技術の集大成、蒸気とゼンマイによる機械塔の完成披露宴が行われていた。制作者や評論家、多くの著名人やマスコミが集まり、人間というものが持つ大きな可能性に感嘆の声を漏らしていた。

誰かの合図とともに建物の明かりが一斉に消えたかと思うと、蒸気とゼンマイが見計らったかのように動き出し、明かりを灯し始めた。場内に盛大な拍手が沸き起こる。

しばらくして、髪をオイルでぺたぺたに固めた恰幅のいい男性が場を一旦静め、会場の右手側の扉から吟遊詩人の一団を招き入れた。大きな拍手と共に、ヴァイオリン、チェンバロ、バグパイプなどを持った六人の吟遊詩人が現れ、高官たちの自慢していたゼンマイ仕掛けの壁の前に横一列に並んでいく。「メトラの有名な吟遊楽団の方々です」という紹介に併せて、吟遊詩人たちは順番に頭を下げた。ひそひそと聞こえてくる声を気にすることなく、ヴァイオリンを持つ詩人の合図で一斉に演奏が開始された。成功を歓迎するような軽やかな音色は、場内の人々の耳の中ではずみ、思わずリズム

に合わせて体が動きだす。言い争っていた高官たちも一旦口を閉じ、やがて手を取り合って踊り始めた。

しかし演奏の途中で、バグパイプを奏でていた詩人リード・メロディオオンが、周囲を気にするようにきよろきよろと頭を動かし、自分の楽器を気にし、ヴァイオリンを奏でる詩人に目で何かを訴え始めた。

他の詩人も、観客でさえ気付き始めた。楽器から奏でられる音が、徐々に勝手に強みを増していく。やがて耳を押さえたり、演奏を止めさせるように怒鳴り声を上げる者が現れ、多くが音から逃れるように会場を出て行ってしまった。

詩人たちは必死にチューニングして音を元に戻そうと試みるが、まるで効果はなかった。

次の瞬間、楽器が激しい音を立てたかと思うと、次々に爆発するように砕け散り、その破壊音は衝撃波となってゼンマイ仕掛けの壁や椅子、テーブルとありとあらゆるものを破壊し、吹き飛ばしていった。

あっという間に、未来を夢見る建物は見る影もなくぼろぼろになり、幸い死者は出なかったものの大勢のけが人が出てしまうこととなった。吟遊詩人は全員器物破損、業務上過失傷害の疑いで逮捕されたが、連行中にリードが突然意識を失って倒れ、一人病院へと運ばれていった……。

それとほぼ同じ時間、隣町メトラでも一つの事件が起こっていた。

コントラスとメトラを分断するように流れる一本の長い小川。上流ではコントラスによる建設工事が行われている。トーンはその日もいつものように川縁に座って音楽の練習に励んでいた。

「少しは上手に弾けるようになったかな？」

腰までもある長く赤い髪を風にたなびかせたビオラが、トーンの隣に座って表面に花の精巧な模様が刻まれたオカリナをポケットか

ら取り出した。

「遅かったじゃないか」

ビオラがむすっとした表情を浮かべる。

「私が朝弱いこと知ってるくせに」

トーンがビオラと出会ったのは、ダイヤグラム大陸への機械の導入を反対し続けた音楽派の人々がこのメトラに追いやられた後、トーンが一人、この小川で草笛を吹いていたことだった。

「きれいな音ね」

トーンはぎよっとしてとっさに草笛を手の中に隠し、声の方へ振り向いた。

「別に隠さなくてもいいじゃない。ねえ、もう一度聞かせてよ」

すらっとしたきれいな女性が、トーンの目の前で太陽の光を浴びて真っ赤に輝いた髪をなびかせながら立っていた。同年とは思えないほど美しく、トーンは手が緊張して上手く音を出すことができなかった。女性はくすくすと笑い、同じような草を探して摘み取り、隣に座ってトーンの仕草を真似るように吹き始めた。なかなか上手く音がでない。仕返するようにトーンも笑い声を上げると、緊張がほぐれたのか次はいつものように草笛を鳴らすことができた。示し合わせたかのように女性も草笛が吹けるようになり、二人で一緒に曲を奏でた。女性は途中で奏でるのを止め、美しい音色を響かせるトーンの姿をずっと眺めていた。

視線に気付いたトーンが思わず頬を赤らめるのを見て、女性はまたくすくすと笑った。

「お礼に、私も一つ弾いてあげる」

そういつて、背負っていたカバンからオカリナを一つ取り出し、演奏を始めた。ゆったりとした包み込むような音楽は、トーンの心に触れ、揺り動かしていくように感じられた。元々自然が奏でる音に興味を持っていたトーンは、すぐにオカリナの音に心をつかまれていった。

女性は演奏を終えると、代わりがあるからといってトーンにオ

カリナを渡した。自分はオカリナが好きだから、オカリナを使って、さっきのような美しい音楽を奏でてほしいと……。

「私、ビオラ。ビオラ・メロディオン。オカリナ、大事にしてよね」それから二人は毎日のようにこの小川へとやってきては、一緒にオカリナを吹くようになった。初めは上手く吹くことができなかったトーンも、ビオラの指導のおかげで徐々に上達していき、いつのまにかアンサンブルを奏でられるまでに成長していた。

太陽が傾き始める頃にはいつも決まって、二つの優しい音楽といくつもの暖かい自然の奏でる音楽が、メトラを包み込んでいた。

しかし穏やかな時間は長くは続かなかった。ある日、上流で行われていた工事の騒音が二人のいるところまで聞こえてくるようになり、二人は更に下流へと追いやられてしまう。

歩きながら、ビオラが時折音のする方を気にしながら口を開いた。「工事しているっていうのは知ってたけど、まさかここまで音が聞こえてくるなんて……」

「機械派の人間は、過去のことなんて忘れてしまったんだ」

トーンは吐き捨てるようにいった。

「機械なんて、何が起るか分からないっていうのに」

大昔のダイヤグラム大陸は、高度な機械文明が発達した機械大国だったという。飛空艇と呼ばれる乗り物が空を自由に飛び回り、機械で作られた人間によって人々は自分が働くことなく生計を立て、毎日を過ごしていた。ある日自分たちの優れた技術が奪われることを恐れた大陸の人々は、他の全ての国との交易を遮断したが、その頃から、大陸のあちこちで原因不明の災厄が起るようになった。住んでいた人々は一人残らず死に絶え、建物や植物、大陸上に存在する全てのものが腐っていった。大陸の異変に他の国が気付き調査船を送ったが、そのどれもが戻ってくることはなく、やがてダイヤグラム大陸は呪われた死の大陸と呼ばれるようになり、誰も近寄らなくなった。

そんな大陸を人が住めるまでに復活させたのが、一人の吟遊詩人だといわれている。吟遊詩人は一人でこの大陸に訪れ、たった一日で呪われた死の大陸を緑の生い茂る命の吹き込まれた大陸へと変えてしまったそうだ。

所詮は幼い頃に歴史の授業で習った話に過ぎない。だがトーンは、それを全て信じていた。この大陸に再び機械が蔓延するようになった原因である大昔の技術の産物が、トーンがまだ小さかった頃に次々に発見されたのだから。

初めはもちろん、多くの人が機械の使用に反対していた。過去と同じ災厄を引き起こす気かと、たくさんの機械が使われないまま処分された。しかし人の目を盗んで機械を使用するものが現れ、やがてその利便性が人々の欲望に満たされた心をわしづかみ、あつという間に機械は生活の一部となっていた。頑なに機械を反対し、廃棄を訴え続けた人々は音楽派と呼ばれ、人間のたいなる可能性を阻む敵だとして拒絶され、忌み嫌われる対象となった。

トーンにとって機械は、災厄を引き起こす悪魔であり、自分たちから自由を奪った許し難い敵であり、演奏の邪魔をする疫病神でしかなかった。

しかしその時はまだ、本当の人の命までも奪うことができるなどとは、思ってもいなかったのだが……。

「ここまで来れば大丈夫だろう」

だいぶ川を下ったおかげで、もう騒音は聞こえなくなっていた。再び川のせせらぎが聞こえ、トーンがほっとため息をつく。視線の先にちょうど良い大きさの岩が二つあるのを見つけて、ピアノにあるそこに座るよう促した。

「うん……今、行くから……」

この時、何故ピアノを連れて町に戻ろうとしなかったのだろうか。「さあ、座って。自然の音を聞いていればきつとすぐに気分も良くなるよ」

一体何の根拠があつて、そんなことを口にしたのであるか。

もう一つの岩に腰掛け、目をつむつて川のせせらぎに耳を傾けた時だった。川に何かが落ちる音が聞こえてはっと目を開けた時、トーンの頭の中は一気に真っ白になった。

川にビオラが横たわっていた。頭を抱えるようにしてうずくまり、けいれんを起こしていた。トーンは急いでビオラを担ぎ自宅へと戻ったが一向に回復する気配がなく、呼んできた医者も、原因がわからないとお手上げの様子だった。

ビオラはひどい熱と激しい嘔吐に見舞われ、数時間もしないうちに美しく端正だった顔はすっかりやつれ、苦しそうにひきつる表情を見てトーンはいてもたってもいられなくなり、自分でも気付かないうちにオカリナを吹いていた。

ビオラの表情が落ち着いたように見え、体にも生気が戻ってきたように思え、トーンは必死になつてオカリナを吹いた。決して慌てずに教えられたとおり、ゆっくりと、穏やかで柔らかな音楽を奏で続けた。

震える手で、ビオラはトーンを手招きした。何かを伝えようとしているのが見えて、トーンが演奏を止めて耳を近づける。しかしビオラは何をいうでもなく、両手で抱えるようにして持っていたものをトーンの手のひらの上に置いた。

それは、ビオラの持っていたもう一つのオカリナだった。

「やめるよ。これはビオラのものだろ。君が持っていないと、また一緒に演奏できないじゃないか」

いいながら、トーンは必死に溢れ出ようとする涙と、震えようとする声を押さえ込んだ。「まだ、教わることはたくさんあるんだから……」

ビオラは細くなった手を伸ばしてトーンの頬に流れた涙を拭い、優しく微笑みかけた。

「上手に弾けるようになったご褒美。このオカリナを使って、みんなを幸せにしてあげてね……」

そういい残し、ビオラはゆっくりと目を閉じた。
その目はもう二度と、開くことはなかった。

これを最後に、トーンは音楽を奏であることをやめた。

コントラスとメトラで起きた二つの事件に少なからず機械が関連していることから、音楽派は機を逃すまいと機械連盟に機械の停止を申し立てるが、証拠がないため全く相手にされず、むしろ事件は吟遊詩人たちが意図的に引き起こしたのではないかとして、抗議した何人かの吟遊詩人は逮捕されてしまった。

それからというもの、音楽派はメトラでこっそりと暮らすようになった。ほとんどが音楽を恐れるようになり、歌うことを止めた。徐々に他の町へ離れていく者も増え、メトラはやがて少数の人間が暮らす、閑散とした、音楽のない町と化してしまった。

第二章：動き出した音楽

トーンはビオラが死んで以来まるで魂が抜けたように、小川にあったあの岩の片方に座り、何をするでもなく川の流れをただずっと眺めていた。ビオラとの思い出が詰まったここは全てを奪った最悪な場所でもあったが、どうしても離れることができなかった。ビオラがまだここにいるような、そんな気がしてならなかった。しかし、木が風にゆれる音も、虫の鳴く音も、川の流れる音も、トーンにとつてはもう雑音でしかなく、耳に栓をつめて外界からの音を遮断していた。

だから、一体のオートマシンが今まさにこちらに向かって歩いてきていることなど、知るよしもなかったのだ。

突然右肩に激しい衝撃を受け、トーンは現実に取り戻された。何故だか全身が重だるく、ほてったように熱い。右肩に鋭い痛みを感じ、肩に刺さっている鋭い金属のようなものを見て、その先にあるオートマシンを見た。笑っているかのように、顔をかたかたと上下に揺らしてこちらをみている。

「何でこんなところに……」

トーンは慌てて刺さったオートマシンの腕を引き抜こうとしたが、腕の先がいつのまにか十字に分かれ、かぎ爪のようにトーンの肩をしつかりと捕まえていた。引き抜こうとすればするほど肩に食い込んでいく。

トーンははつとして動きを止めた。オートマシンのもう片方の腕が動き出し、トーンの額にその指先が向けられたのだ。金属が削れ合うような嫌な音を立てて勢いよく回り始めたかと思うと、腕がトーンの肩を貫いているものと同じ、鋭い槍のような姿に変わる。トーンは突然頭が痛くなり始めた。別に殴られたわけでもないのに、痛みはどんどん増していった。気持ちが悪い……。

オートマシンの腕がゆっくりと引かれ、トーンの額めがけて押し

出される　と次の瞬間、オートマシンと同じような槍を腕に取り付けた男がオートマシンに突撃し、トーンの肩に突き刺さっていた腕を根本から粉々に吹き飛ばした。さらにその後ろから数人の守備兵が現れ、持っていた銃でオートマシンの動きを止める。その隙にトーンは先ほどの男と一人の女に抱えられて、少し離れた岩場の影に下ろされた。

「大丈夫か？」

トーンは隣で女が片膝をつき、どくどくと血が溢れ出す肩の傷に薬のようなものを塗り始めたのを見て、目を大きく見開いた。溢れていた血が、あつという間に止まってしまったではないか！

驚いているトーンを尻目に、女は黙々と包帯を巻き始めた。男の姿はなかった。恐らく仲間の元へ戻ったのだらう。

「痛いだろうが、直に治る。安心しろ」

血を止めた薬のことも気になったが、何よりもいきなりやってきたオートマシンのことが気になっていた。

過去の産物が唯一同じ姿となって復活したもの。それがオートマシン　町の安全を守る機械で作られた人間だった。メトラを除くほとんどの町は、このオートマシンによって守られているはずだった。人を襲うなどもつてのほかだ。

「よし、これで大丈夫だ」

血は止まったものの、激しい痛みが消えることはなかった。包帯を巻き終えた女の胸ぐらをつかみ、トーンは思い切り睨み付けながら口を開いた。

「何が大丈夫なんだ、一体何が！　メトラに機械が入り込んでいる時点で、十分な規則違反だ。吟遊詩人を馬鹿にするのもいい加減にしろ！」

トーンを見る女の目は、どこか悲しげに見えた。

「私にも状況が飲み込めていないんだ。コントラスのオートマシンが、突然暴走を起こして……」

「暴走？　笑わせるな！　使いこなせないなら始めから　ぐっ」

肩の痛みにトーンがうめき声を上げる。遠くで先ほどの守備兵のものと思われる悲鳴が聞こえ、女がはっと立ち上がった。

「話しなら後でいくらでも聞いてやる」

女はそういうと、身を翻して悲鳴のした方へと駆けていった。トーンもその後を追う。

始めに目に入ったのが、地面に血を流して横たわっている三つの守備兵の姿だった。ぴくりとも動かず、開いたままの目にはすでに光が失われているように見えた。先ほどの金属の槍を腕に取り付けた男だけが、何とかオートマシンの動きを止めようと攻撃を繰り返している。しかし防戦一方といったところか。オートマシンの繰り出す多種多様な動きを防ぐだけで息が上がり、なかなか攻撃を仕掛けられないでいた。女が遠くから銃で支援するが、たいした効果になっていないように見えた。

トーンは自分がかくりと膝をついていたことに気付いた。足に力が入らない。頭痛がまたひどくなり、今度は耳鳴りまで聞こえてきた。血が足りないのか視界がぐるぐると回り始める。傷の痛みからくるものではなく、もっと内部、体の組織自体が破壊されていくみたいだ……

その場から逃げたそうとしたとき、ふと心地よい風が頬をなでたかと思うと、風に乗ってやってきたのかどこから音楽が聞こえてきた。トーンは足を止めて、その柔らかな軽やかな音楽に耳を傾けた。徐々に頭の痛みが和らぎ、耳鳴りが薄れていく。

気付くとオートマシンの動きが若干鈍くなっているように見えた。戦っていた二人もそれに気付いたらしく、これを機に一気にたたみかける。女が銃でオートマシンの関節の動きを止め、バランスを崩したところに急激に回転する金属の腕が、頭部めがけて振り下ろされた。

大きな破壊音と共に、オートマシンはその機能を失った。

「まだ息のある兵は、すぐにここの病院に連れて行け。彼には私か

ら話すわ。大丈夫。たぶん、原因は彼じゃないから」

女は金属の腕を持った男にそう告げ、オートマシンの回収にやってきた兵に一言二言伝え終わると、トーンの元へやってきた。戦いが終わってからずっと、トーンは岩場に座り込んでいた。突然聞こえてきた音楽のおかげで随分と気分はよくなっていたが、まだ頭がくらくらしていた。まるで脳みそを虫がはいずり回っているような、いい知れない感覚に襲われる。肩も、少し動かすだけで激痛が走る。この痛みさえなければもっとましだったかも知れないと思うと、余計に腹が立った。

「なんだ、まだ痛むのか？ 随分顔色が悪いじゃないか」

「ああ、痛むよ。あんたのつけた薬が悪かったんじゃないのか？」

女の軽い言葉にむっときたトーンは、はねつけるようにいった。

「そもそもあんたらのペットにかみつかれなきゃ、こんな思いもせずに済んだんだ」

「……ああ。全く、そのとおりだな」

突然声の調子が低くなり、女は回収されていくオートマシンの残骸をじっと眺めていた。その横顔が、トーンには何故か非常に悲しそうに見えた。

「何かあったのか？」

「いや、君の言葉を思い出しているな」

「言葉？」何かいったらどうか。

「使いこなせないなら始めから使わなければいい。確かに、君の言うとおりだったのかも知れない」

面と向かってそういわれると、逆に返す言葉が見つからなかった。まさか肯定されるとは思ってもいなかった。だが今更肯定されたところで、何かが変わるわけでもない。

「今さら何を思っているんだ。まあ、助けてくれたことには礼をいうよ。僕はトーン。トーン・アンドリュースだ。いっておくけど、うちの病院は本格的な設備なんか整っちゃいない。けが人を助けたのなら、どこか向こうの町に送ってあげた方がいい」

女は立ち上がり、守備兵の規則に則るようにして敬意を払うように一礼をした。

「私はミンス・コンサーティナ。コントラスで守備第一隊隊長をやっていた。本当に申し訳ないことをしたと思っている」

話し終えると同時に町の方から兵士が走ってきて、先ほどトーンがいったことと同じ事をミンスに告げた。ミンスは最後にもう一度トーンに向かって一礼すると、兵士に矢継ぎ早に指示を与えながら町へと向かっていった。それを見送ることなく、トーンは一人自宅へと戻っていった。

「ただいま」

家の中に入ると、奥から何やら良い匂いが漂ってきてトーンは思わず鼻をひくつかせた。今日の夕食はきつと自分の大好物に違いない。そう思うと何だか急にお腹がすいてきたような気がして、足早に扉を開けた。

居間では、母フルートが丁度テーブルに料理の盛りだすき皿を並べているところだった。フルートはすぐにトーンに気付いたが、明るく迎えようとした笑顔は、一瞬にして不安に曇った表情に変わってしまった。持っていたお皿が手からすべり落ち、盛られていた料理もろとも床に散らばってしまう。トーンは慌てて散らばった料理を片付け始めた。香ばしい匂いが一面に漂っていた。

「せつかくのおいしそうな料理なのに、何やってるんだよ」

フルートは呆れたように大きなため息をついた。

「それはこっちの台詞よ。その肩、大丈夫なの？ 何をやってきたのか知らないけど、一体どうやってたらそんなに包帯を巻くようなことになるのよ」

トーンは拾い集めた料理を紙で包み、まとめてゴミ箱に捨てた。水につけた雑巾をしばらく、床を拭き始める。

「別に、ちょっと転んだだけさ。見ての通りちゃんと動くしね。痛みはあるけど、そんな気にするほどでもない。ま、若いうちはみんな

な無茶もするものさ」

トーンが笑い声を上げる。それでもフルートは不安げに包帯の巻かれた肩から目を離そうとしなかった。

「ならいいけど、最近あんた、ずっと元気がなかったから……」

拭き終えた床に鼻を近づけてみる。匂いは当分の間は取れないかもしれない。

「母さんが心配しているようなことは、死んでもやらないって。自分の息子が信じられない？」

それ以上フルートは何もいわず、残りの料理を再びテーブルに運び始めた。

ビオラが死んでから音楽を弾かなくなり、家では元気な自分を演じる息子をフルートがずっと心配していることをトーンは知っていた。前に一度遅くまで帰らなかったとき、自殺でもしたんじゃないかとメトラの住人総出で探索されたことがあったほどだ。最近料理に力が入っている理由も十分理解していたが、ビオラを忘れない限り、前のような自分に帰ることはできないだろうと思っていた。

「そうそう、知ってる？ この前までコントラスの病院に入院していたリードっていう吟遊楽団の人が、いつのまにか病院を抜け出していったっていう話。何があったかわからないけど、あんな機械だらけの場所に閉じこめられたら誰だって逃げ出したくなるわよね。でも家にも帰ってきていないなんて、本当に何かあったのかしら……」

あれこれと余計な詮索するのはフルートの悪い癖だ。こういうときは決まって簡単にあいづちをする程度だったのだが、今回はそうもいかなかった。

「あの機械塔の事件って、衝撃波を起こしたのは吟遊楽団じゃないんだよな。塔に作ってたっていう機械が誤作動を起こしたってことも十分あり得たんじゃないかって思うんだよ」

オートマシンの暴走を見る限り、機械の誤作動は相当危険なものに違いなかった。衝撃波を作り出すことぐらい、容易なことのように

に思えたのだ。

フルートは少しの間頭を傾けて考えていたが、やがて首を横に振りながら答えた。

「私にはわからないわ。サンザさんなら外のお友達がたくさんいるし木の声も聞こえるっていうから、そういうことに詳しくそうな気がするけど……」

「フルートさん、大変だ！」

突然玄関の方で大きな声がしたかと思うと、きれいに整えられたあごひげを生やした年老いた男が部屋の中に入ってきた。フルートが笑顔でそれを迎える。

「あらサンザさん、またきれいな楽器でもできあがりました？」

サンザは荒い呼吸を整えようとせす、肩を上下に揺らしながら答えた。

「楽器のことじゃねえ……いや、それよりもっと大事なことなんだ」

いつもとは違う切迫した様子に、フルートも真剣な表情へと変わる。

「今日コントラスで暮らしている奴から連絡があつたんだが、それが、コントラスが無くなつちまつたつて！ あちこちの木も騒いでいるんだ。仲間が燃えてる、たくさん死んでるつてな。聞くところによれば、何でも町中にあつたオートマシンが一斉に暴動を起こして、町を破壊しちまつたらしいんだ」

あまりに突然の報告に、二人とも哑然とするしかなかった。

トーンははつとミンスの最後の言葉を思い出した。コントラスの隊長をやつて『いた』……それに何があつたのかと聞いたときのあの驚いた表情。あのときのオートマシンは、コントラスを破壊してメトラにまで流れ込んできた暴走したオートマシンだったのだ。

フルートは未だに信じられないといった表情でいった。

「一体何が起きたつていうんです」

しかしサンザの視線はトーンの右肩に移されていた。

「トーンお前、その包帯どうしちゃったんだ。いや、何があったか
って？ 何でも研究段階で事故を起こしちゃったらしくて、その時
に発生した電磁波か何かがオートマシンをおかしくしちゃったって
話だ。そついや、暴走する直前に音楽が聞こえてきたとかもいつて
たな。信じられないなら、外に出て見てみるといい。今ならまだ、
西の空に黒い煙があがっているのが見えるだろうよ」

フルートと一緒にトーンは慌てて外に飛び出した。すでに他の人
々もこぞって西側の空を眺めている。紛れもなく、黒煙が上がって
いた。それも一本ではなくあちこちに。

しかしトーンは、まさか自分がこの事件に直接関与することにな
るとは、この時はまだ思ってもいなかったのである。

第三章：敵対

第三章 敵対

コントラスが壊滅したと教えられてから三日、初めは「機械の呪いだ」とか「罰が当たったんだ」と騒いでいたメトラの人たちも、今ではすっかりいつもの生活に戻っていた。いつもとまるで変わらない景色を毎日のように見せられては無理もないのかもしれない。だがトーンは違った。実際にその目で見たオートマシンの、不気味な笑顔にも見えたあの表情は、単なる暴走とくくっていいものだとはい到底思えなかった。

「音楽の神様を裏切った罰が当たっただけよ」

フルートはそういつてトーンの話をしるくすっぱ聞かずに、買い物へ出かけてしまった。メトラには、機械にまみれた生活に異議を唱え、そのために住む場所や家族を失った音楽派の人々が住んでいる。古くから伝わる、歴史に名を残した音楽の神の言葉を信じ、音楽をこよなく愛し、空気を歪める機械は悪魔の化身だとして忌み嫌ってきた。機械を過剰利用することは、神の冒瀆に値するとして。

実際に、機械は暴走を起こした。それも町を一つ破壊してしまうほど激しく。これまでそんな大きな事件は起こったことがなかったが、最近になって様々な問題が発生し、その全てに機械が関係している。思えばあの吟遊楽団を襲った事件から全てが始まっているのではないだろうか。ダイヤグラム大陸は灰と血で赤白く染まり、再びその命を終えてしまうのではないかと、トーンは不安でならなかった。

外へ出て、コントラスの方角を眺めた。未だにゆらゆらとのぼる黒い煙が、事の壮大さを物語っているように思える。

そのときふと、トーンの耳に聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。守備兵が暴走したオートマシンと戦っている時に流れてきたものと同じ音だ。トーンは惹かれるようにして、音のする方へと歩いてい

った。

街から少し離れた場所にある大きな池のほとりに、麻布でできた帽子を浅くかぶった男が地面に座ってホルンを吹いているのが見えた。細くしなやかな指が細長いホルンを上手に扱い、細い体にしては考えられないほど力強く、かつ繊細な音を引き出している。トーンはじつと立ったまま、奏でられる美しい演奏に身をゆだねていた。こうしているのは何日ぶりだろうか。ピアノがいなくなつて以来、トーンは意識的に音楽を避けるようになっていた。そうすれば、嫌なことを思い出さなくて済むと思っていた。しかし違った。音楽がこれだけ心地良いと思つたのは初めてかも知れない。

トーンは無意識のうちに、ポケットにずっとしまつたままにしていたオカリナに手を触れていた。あの時から何も変わらない温もりを感じて、思わず涙がこぼれた。

男が最後の音色を奏で終わると、視線を池の方に向けたまま口を開いた。

「拍手をもらったことはあるが、涙をもらったのは初めてだ」

「いや、すみません」

トーンが慌ててこぼれた涙を拭おうとするのを、男が言葉で制する。

「せつかく流れた涙だ。流しておけばいい。そうすれば心の内にため込んだ重いものも一緒に流れてくれる」

まるで自分の過去を知っているかのような口振りに、トーンはどきつとして男を見た。見覚えがあるように思えたが、今初めて見る顔のようにも思えた。いぶかしむトーンを尻目に、男は一人話を続けた。

「しかし、私も久しぶりにいい演奏ができた。やはり聞いてくれている人がいるというのは良いことだな」

男は軽く顔をほころばせながら、うんうんと誰にでもなく頷いている。

「いつもここで演奏しているんですか？」

「ああそうだ。ここの池の歌声は美しいぞ。つと、紹介が遅れてしまったな。私はウィンド・ホルンだ。ウィンドと呼んでくれて構わないよ。君は……」

振り向いたときにトーンの右肩に巻かれた包帯に気づき、一瞬男は顔をしかめたかに見えたが、すぐに元の表情に戻って言葉を継いだ。

「珍しいな、そんな大層に包帯を巻いて。何か大きな怪我でも？」

「え、ええ……まあ」

なんと答えていいかわからずにトーンは言葉をにぎしたが、その答えを相手の方からいわれるとは思ってもいなかった。

「オートマシンにやられたのか？」

トーンはぎょつとしてウィンドを見た。ウィンドは暗い表情で言った。

「気付くのが遅すぎたか……すまないことをした」

トーンは呆然とその場に立ち尽くしていた。何をいつているのか、何故謝られているのか見当もつかない。トーンの様子に気付いたウィンドがにこやかな表情を浮かべた。

「お詫びといっではなんだが、面白いものを見せてあげよう。まだ、涙のお礼もしていないことだしな」

そういつて、座ったままあごを白い手でさすり始める。

「ふむ……そうだな。あそこに背の高い木が二本生えているのが見えるな？ よし。今からあの木の間を、二羽の鳥がこちらに向かつて飛んでくる。あの木の間だ」

ウィンドが指さす方にトーンは視線を移した。すると次の瞬間、宣言通りに二羽の鳥が二本の木の間を通って飛んできて、二人の頭上を超えていった。白い羽が一枚、ひらひらと落ちてくる。トーンは手のひらでそれを受け止めた。

「すごい……いったとおりだ！」

「その羽は予想していなかったがね。きつと、音楽の神から音楽を愛する君への贈り物だろう」ウィンドは笑顔で答えた。

「一体、どうやったんですか？」

「別に何も。ただ、音を聞いただけさ。風の音をね」

トーンは首を傾げた。風の音といえば、夜中に扉を叩いたり、家を揺らす時に鳴る音くらいしか聞いたことがない。

「この世界には、至るところに音が存在する。波の押し寄せる音や、草木が揺れる音、木の葉が擦れる音など、想像もつかない数の音がな。音はそれぞれで意味を持ち、自分を歌うものもあれば、周囲の様子を歌うものもある。私は、風が運んでくる様々な音を聞き分けて、遠くの様子を知ることができるのさ。あの日、汚れて歪んだ音が聞こえてすぐに機械がメトラに迷い込んだとわかったが、まさかすぐ近くに人がいるとは思ひもなかったんだ」

トーンはふと、ピアノのことを思い出した。昔、一緒に音楽の勉強をしていた時に、彼女も同じようなことをいつていた。大小さまざまな石を集めて簡単な音楽を演奏してみたり、落ちていた太めの枝を拾って、即席の笛を作ったこともあった。「音楽は、人が作り出したものじゃない」という言葉は、今でも心に残っている。楽器も、自然が作り出した音楽を美しく思った人間が自分でそれを再現しようと思っただけで作り上げたものらしい。

ウィンドが立ってじっとしているのを見て自分も聞いてみようと思っ風音に耳を傾けてみたが、ウィンドの険しい表情から、もう遊びは終わっていることに気付いた。

「戻った方がよさそうだ。機械が、この町に近づいている」

町の広間に戻ると、町の人々全員が広間に集まっていた。奥にはどこかの町の守備兵が何やら大きな機械をいじりながら話している。その中にはミンスの姿もあった。守備兵に向けて飛ばされるたくさんの野次の中、トーンはウィンドと別れ、母の姿を見つけて人混みをかき分けながら近づいていった。

「何かあったの？」

「あんだ、今までどこ行ってたのよ」フルートが呆れた顔でトーン

を迎え入れた。「私もよくわからないのよ。気付いた時にはもうあの人たちが得体の知れない機械を持って町に入ってきたらしいわ。男の人たちが止めようとしたらしんだけど、ほらあそこ」

フルートが示した方向に視線を移すと、人混みから離れた隅であちこちに傷を負って痛みにつめく数人の男を見つけた。フルートがため息をつくようにいった。

「ひどいことするわよね。何で私たちがこんな思いをしなくちゃいけないのかしら……」

「おおトーン、一体どこに行つてやがったんだ！」

大きな声にトーンは辺りを見回してみたが、あまりの人混みで声の主を見つけることができずにきよろきよろしていると、再び背後で声が聞こえてきた。

「こつちだこつち！」

今度は発見することができた。少し遠くにこちらに手を振る毛のないサンザの頭が見えたかと思うと、恰幅の良さからは考えられないほどすると人の間をすり抜けて二人の元へと近づいてきた。

「全く、母さんに余計な心配かけさせるんじゃないやねえ」

もうどこにもいかせないぞといわんばかりに、サンザがトーンの頭を両腕で覆つてぎゅっと抱きしめる。汗くさいにおいが鼻についた。

フルートはふふつと微笑みながらいった。

「いいのよ、サンザさん。こうやって無事に帰ってきたわけだし。

一緒に探してくれてありがとうございました」

サンザが照れて力が弱まった隙をついて腕から逃げ出した後、トーンはその向こうに見える巨大な白くすんだ鏡のようなものに視線を向けた。

「諸君！」

突然鳴り響いた巨大な音に、村の住民全員が両手で耳をふさいだ。同時に、これまでの騒ぎが嘘のように静かになった。広間の正面に設置された鉄製の壇の上に、しわ一つない新品同様のスーツに身

を包んだ男が巨大な鏡を背にして立ち、眼鏡越しに周囲を見渡している。

「突然の訪問で大変申し訳ないが、一つ確認しておきたいことがある、お邪魔した」

男の声は口元からではなく、左右に配置された大きめの黒い箱から聞こえてくるようだった。時折耳をつんざくような高い音が漏れ、なんだか気持ちが悪くなってくる。そんなことなど全く気にしていない様子で、男は大きな声で続けた。

「君たちも、コントラスで起きた悲しむべき大災害はもう知っているはずだ」

「何が大災害だ！」

「機械の暴走は、お前達が招いた人災じゃないか！」

巨大な音に耳が慣れてきた何人かの男たちが声を荒げて壇上の男に野次を飛ばす。それに呼応するように次々と声が上がリ、あつという間に周りはやかましさを取り戻した。と、今度は大きな爆発音が鳴り響いた。壇の前にいた守備兵が、構えていた銃を空に向けて発砲したのだ。それが何を意味するか、その場にいた全員がすぐに理解し、口をつぐんだ。壇上の男は満足げな表情を浮かべて再び口を開いた。

「さて、諸君！ この大災害は、何故起きたのか。起こるべくして起きた？ いや、違う。これは、起こすべくして起こされたのだ」

壇上の男がこれ見よがしに周囲を見渡す。人々は不安そうにそれを眺めていた。

「これを見てほしい」

背後の鏡が小刻みに振動するような音を発したかと思うと、突然ぱつと一枚の写真が浮かび上がった。近くで話し声が聞こえてくる。写真には交差点を行き交う人混みがぼやけて見える中、中央に立つトーンと近い年ぐらいの若い男だけが鮮明に映っていた。茶色のジャケットを羽織り、背には楽器を入れる専用のショルダーが背負われている。写真が消えて元のくすんだ鏡に変わったかと思うと、今

度は別の写真が浮かび上がった。建物や地面などありとあらゆるものが粉々に破壊され、その残骸のようなものが至るところに散らばっている。一枚目の写真で若い男が立っていた場所と同じところに同じ種類のシヨルダーがぼろぼろになって落ちているのが見えた。再度写真が切り替わり、先ほどの二つの写真が左右半分ずつに映し出された。

「この二枚は、同じ場所で撮影されたものだ」

どよめきが走った。誰だって、この二枚の写真を見て同じ場所だと気付く人はいないだろう。それほど、違いすぎた。

「惨状をどうこういいたいわけではない。問題はこの男だ」

壇上の男が左手を写真に向けると、左側の写真にあるシヨルダーを背負った男の上に赤い丸が映し出された。

「この男が背負っているのは君たちもよくご存じのはず。バッグパイプという楽器を入れる専用のシヨルダーだ。そして……」

赤い丸が、右側の写真にあるぼろぼろのシヨルダーに移される。

「まるで同じ物が、ここにぼろぼろになって落ちている。さて、それは何故か」

写真が消えるのと同時に赤い丸も消え、壇上の男は再び正面を向いていった。

「さらに我々の調査で、コントラスが消える直前に忌々しい音楽が鳴り響き、同時に人間の体に害を及ぼすほどの超低周波が検知されているのがわかった。これは、特定の楽器でも使用しない限り発生させることは限りなく不可能に近いとされている」

最後までいわずとも、男が何をいいたいのか、先ほどから感じられる冷たい視線の正体がなんなのか、その場にいた誰もが気付き始めていた。

「先ほどの二つの画像、事件直前に鳴り響いた音楽、異常なまでの超低周波の発生。それが招いた、コントラスの壊滅」

「俺たちは何もやってない！」

住民の一人が突然叫び声を上げたが、守備兵が銃口を向けたのに

気付き、慌てて口をつぐんだ。

「別に君たちを疑っているわけではない。先にも言ったが、問題なのは先ほどの若い男だ。名は、リード・メロディオン」

その言葉に、先ほど小声で話し合っていた二人の男がびくりと体を震わすのを、壇上の男は見逃さなかった。守備兵に二人を連れてくるよう指示し、何か知っているかと問う。二人は昔、コントラスで起きた衝撃波の事件に居合わせ、パーティに招待され音楽を演奏した吟遊楽団の団員だった。リードは吟遊楽団の一人で、倒れて病院に運ばれた後、消息を絶ったという。

「他に、何か事情を知っている者はいるか？」

住民の半分ほどが手を挙げた。それぞれリードの過去、学歴、音楽に対しての才能、性格や癖など必要のなさそうな情報ばかりであったが、自分が助かりたい一心か、僕が私かと壇上へ押し寄せた。壇上の男が後ろを向いていった言葉は、そんな彼らの期待を裏切るものだった。

「ミンス、こいつらを牢にぶちこんでおけ」

周囲が一瞬にして静まりかえった。男の表情は、まるで仮面を脱ぎ捨てたピエロのように冷たかった。

「事件に荷担している可能性のある者は、例えば子供であれ危険因子と見なす！ 今手を挙げた者全員、ほとぼりが冷めるまで牢獄暮らしだ！ 抵抗する者や異を唱える者は、即刻死でもって償ってもらう。いいな！」

命をなげうつてまで抵抗しようとする者は誰一人存在せず、始めの勢いは全くどこかへ消え失せていた。守備兵によって一人一人鎖状の手錠で繋がられ、牢獄行きの列車となってゆっくりと歩き始めた。トーンは先頭を歩くミンスの姿を黙って見続けていた。彼女は今、何を思っているのだろうか。本当にこれが正しいとも思っているのか？

トーンはフルートを見た。顔は疾病患者のように青ざめ、目には涙が浮かんでいる。両手を組んで、音楽の神様に祈りの言葉を捧げ

ていた。

「気に入らねえな」

異様な静けさの中で、低く太いサンザの声はいつもの何倍にも大きく聞こえたように思えた。壇上の男がいかにもいらついた語調でいった。

「今、何といったのかな」

サンザの手は震えていた。それが怒りからなのか、怖さからなのかはトーンにはわからなかった。

「気に入らねえっていったんだ。てめえらがやってるのは、単なる責任のなすりつけに過ぎねえ。音楽が悪いだと？ ふざけるな！ 機械をおかしくしたのも、音楽をおかしくしたのも、人の心をおかしくしたのも全部お前たちじゃねえか！」

一発の銃声が鳴った。

壇上の男が構えている銃の先から煙が上がっているのが見えた。

トーンの隣でサンザががくりと膝をつく。

「減らず口を叩くなど、いわなかったかな」

サンザの体が、ゆっくりと前のめりに傾いていき、どすんと音を立てて地面に倒れていった。フルートの奇声にも似た悲鳴が聞こえる。

あまりに突然の出来事に、トーンは体が全く反応しなかった。サンザが、幼い頃から父親代わりに相手をしてくれた優しいサンザが、今日の前で胸から血を流して倒れていた。誰かが近寄って口元に顔を近づけ、まだ息があると声を上げた。他の誰かと力を合わせてサンザを抱き上げ、担架に乗せて病院へと運んでいった。その後ろをフルートが追っていく。

姿が見えなくなっても、サンザはぴくりとも動くことはなかった。トーンにはその姿がまるで、この町の未来を物語っているかのようを感じていた。

このまま、この町は無実の罪を着せられて滅んでいくのだろうか？
しかし次の瞬間、突然耳が貫かれるような、痛みを伴う超音波の

ような音が聞こえてきた。頭が割れそうになるほど痛い。まるで脳みそを直接槍で突かれていると思うほどだ。守備兵も誰もが身動き一つ取れず、全員が耳を押さえて超音波から逃れようとしている。少しもしないうちに、痛みに耐えかねた人々から、悲鳴にも似た甲高い奇声が漏れ始めた。

とその時、再び聞き覚えのある音楽が周囲を包み、徐々に痛みが緩和されていく。見ると、痛み顔に顔を歪めながらも必死にホルンを吹くウインドの姿があった

「誰でもいい、音の発生源を探すんだ！」

ウインドはホルンを片手に、大声で周囲の人々に呼びかけた。トーンは母にその場でじっとしているようにいうと、早速音の聞こえる方へ駆けだした。超音波は普通の音に比べて物質を跳ね返りやすいという性能に、ほとんどの人が悪戦苦闘を強いられていたが、他の人に比べて耳からの情報を真つ直ぐにとらえることができるトーンは、聞こえてくる音の強さや性質からこれまでの道筋を頭の中で辿り、やがて草むらの影に小刻みに震えた大きめの貝が落ちているのを発見した。トーンは側に落ちていた石を拾い上げると、大きく振りかぶり、貝めがけて思い切り叩きつけた。貝は音を立てて砕け散り、まだ小さく震えていた破片も、やがてその役割を終えた。

超音波は消え、その場に一時の安息が流れた……。

「まさか、また君に世話になるとはな」

貝の残骸を調べながら、ミンスが口を開いた。数人の守備兵が右往左往している。

「肩の傷はどうだ。もう痛みはないか？」

トーンは何も答えなかった。何をどう答えればいいかわからなかった。自分の町に機械を持って入り込み、無実の人間を町の仲間を連れ去ろうとした。今回の事件だって、ミンス達が引き起こしたんじゃないかと思いこんでいた。こいつらさえ来なければ、この町はずっと平和だったんだと……。

「なんといえいいか……」

ミンスが言葉を漏らしたとき、遠くから兵士がこちらに向かってくるのが見えた。その後ろには、ウィンドの姿があった。

「失礼します！ ご指示通り、音楽を演奏した人物を連れて参りました」

「ご苦労だった」

守備兵はミンスに一礼すると、踵を返して自分の持ち場へと戻っていった。ミンスがウィンドに向かって軽く一礼する。

「ミンス・コンサーティーナだ。パンの守備兵の第一隊長として指揮を執っている」

ミンスが握手を求めたが、ウィンドはそれに答えず、じっとミンスの目を見つめていた。ミンスは決まりが悪そうに出した手を戻し、話しを続けた。

「急に呼び出して申し訳ないが、確認させてほしいことがあった。

今回の事件、君が音楽を演奏すると同時に、貫くような痛みが和らいだように感じた。何か知っているのではないかと思ってな。今回の事件について」

「神の教えを破り、災害を招いたお前達のどこに、教える義理がある？」

「いわなければ、君も貝を見つけたこの青年も、牢獄にぶちこまなくてはいけなくなる」

トーンは大きく目を見開いた。まさか、まだ疑っているというのか！

「自分たちの非は、あくまでも信じないということか」
ウィンドが大きくため息をついた。

「お前達の想像通り、事件の原因は音にある。しかしその根源は、お前達が過度に使い続けた機械がはき出す超低周波が、空気の調律を乱したからだ。空気の調律が乱れたことで、本来美しいはずの音色は歪められて、今回のような超音波となつてあらゆるものに悪影響を及ぼすようになった。その良い例が機械塔で起こった衝撃波だ。

お前達の愛する機械が反抗期になったのな」

ウィンドの皮肉が込められたいい回しを気にすることもなく、ミンスは一言一句漏らすまいと書類にペンを走らせた。何枚か紙をめくり、貝の絵が描かれている紙を取り出して二人に見せる。

「ではトーンが粉々にしたこの貝も、音が歪められたというのか？
しかし、それではおかしいぞ。ここには機械はほとんどなかった
じゃないか」

「空気は風に流れるだろう。歪んだ調律は時間をかけてこのメトラをも浸食していった。お前達が運び込んだ機械が、そこに追い打ちをかけたんだよ」

ウィンドの責めるような口調にミンスは一瞬表情を強ばらせたが、すぐに元の表情に戻して質問を続けた。

「わかった、質問をかえよう。先に見せたリード・メロディオンという人物は」

「私がわかるのは」

ミンスの言葉をささげるように、ウィンドが口を開いた。

「機械の暴走は空気の調律が乱れたことが原因であるということ。
音はその被害を受けて様々なものに影響を与えるようになったという
こと。その二つだけだ」

ミンスが全ての書類を書き留めて、再びウィンドに向き直った。

「そういえば君の名前を聞いていなかったな」

「ウィンドだ」

「ではウィンド、トーンの二名には、明日から我々守備兵の一員として行動してもらう。今日中に出発の準備を済ませておいてくれ」

「そんな！」

トーンが声を上げた。さっぱり意味がわからない。二人の話の内容もいまいち現実味がなく、信憑性もなかった。空気の調律？ 音の歪み？ おまけに機械派の一員となって行動するだって？ そんな馬鹿な話があったたまるか！

しかしそんな馬鹿な話は、全て力によってねじ伏せられるものだ

と思い知らされる。

「牢獄で余命を過ごすか、一緒に来て誇りを勝ち取るか。選択は自由だ」

フルートはなんて思うだろうか。トーンはいい知れない怒りを覚えながらぐりとうなだれて、母への言い訳を考えながら歩き出した。

後ろの方で「本当にすまない」というミンスの声が聞こえてきた。

家に明かりがついていないのを見て、トーンは少なからずほっとしていた。できるだけ歩く速度を遅くして時間をかけてあれこれと考えてはみたが、一日のうちにあまりにも多くのことが起こりすぎて、全く心の中の整理がついていなかったのだから。

まだ病院から戻っていないのだろう。トーンも一度足を向けようとしたが、どうしても一歩が踏み出せなかった。元気であればいいが、もし元気でなければ……意識が戻らず、いつ回復するかもわからないといわれたら、余計辛くなるだけだった。

「うわぁ！」

部屋に明かりをつけた瞬間、トーンはいるはずもない人物が目に入ってしまった。まだ病院にいたとばかり思っていたフルートが目赤く腫らし、青ざめた顔で床に座り込んでいた。「おかりなさい」

トーンは胸が高鳴るのを感じた。地獄でも見てきたかのようなフルートのうつろな声は、記憶する限り父が死んだとき以来だった。

「サンザの調子、どうだった？」

できるだけ平常心を装ってはみたが、震える声だけではどうにもならなかった。

「意識が戻らないって……あれからずっと。お医者さんがここの設備じゃ無理だって、他の町に運ばれていったわ」

明らかに納得していないような語調だったが、トーンはほっとしていた。生きているとわかっただけで心の重みが軽くなったような

気分だった。

「そこでなら、助かる可能性があるんだろ？」

フルートが吐き捨てるようにいった。

「機械の町よ？ そんなところに希望もなにもあるわけないじゃない……」

赤く腫れ上がった目に再び涙が溜まり始める。顔には悲哀の色が浮かび上がっていた。

「私、何か悪いことしたのかな。音楽の神様に背くようなこと、した？」

フルートの問いかけに、それが求める答えではないとわかっていながらもトーンはただ首を横に振っただけだった。

「ならどうして、いつもいつも機械が私を苦しめるの。どうしてサンザさんがあんな目にあわなくちゃいけないの。お父さんだって……」

トーンは当時まだ小さくてあまり覚えていなかったが、昔まだ機械派よりも音楽派の割合が多かった頃、機械派の人間が機械の良さを伝えるため、大陸中に機械を持って回っていたことがあった。父は今では無くなってしまった反機械連盟という組織に所属し、仲間と共に運動を止めようと各地にやってくる機械派の人間を追い返していた。しかしある時、宣伝中の機械が突然爆発を起こし、多くの死傷者が出てしまうという大惨事が起きた。爆発した機械の傍に立っていた父の亡骸は、もう見る影もなかったという。

「悪いのは向こうなのに、どうしていつも苦しむのは私たちなの！ どうして……」

声を押し殺してむせび泣くフルートの姿を、トーンは真っ直ぐ見つめることができなかった。こんな状態で話しをしても、余計にフルートを苦しめることになるのは考えるまでもなかった。

何もいわずに姿を消すのが一番なのだろうか。心配をかけることにはなるが、断ることができない以上、他に方法は思いつかなかった。

「ちょっとでかけてくるよ」

後ろめたさを抱えつつ、トーンは逃げるように部屋を出て行った。

どこで時間をつぶそうかとメトラを一通り歩いてみた結果、トーンは人目のつかないあの池のほとりにやってきていた。これでいいはずだった。他に方法はなかった。それでも、心に残る寂しさがなくなることはなかった。

「おや、君も来ていたのか」

ぎよつとして振り返り、声の主を見てトーンはほつと胸をなで下ろした。

「それとも、ここに身を隠そうとも思っていたのかな？」

ウィンドは見つけてしまつてすまないともいいたげに軽く笑うと、トーンの隣に腰を下ろした。二人とも言葉を交わさず、池の水面を眺めがら、聞こえてくる様々な音に耳を傾けていた。ここにいると全てを忘れていいように思えてくるくらい、心地がいい。でも、隣で安らぐような顔をしているウィンドに、不快感も覚えていた。

「どうして、そんな顔ができるんですか」

無意識のうちに、自分が声を荒げていることに気付いた。

「わけもわからず向こうの勝手に調査隊の仲間にさせられて、いつ死ぬかもわからない場所に連れて行かれるっていうのに！」

ウィンドの表情から笑みが消え、真剣な眼差しで答えた。

「どのみち、空気の調律が完全に乱れればみんな死ぬ」

一瞬、全てがどこかに消えて無くなつたかのような沈黙が辺りを包み込んだ。

「一体何をいつて……」

「私たち人間は空気を吸うことによってその生を保ち、この声や、池の水が揺れる音、ホルンから吹き出される音楽も全て、空気が存在することで成り立っている。その空気が乱れれば、それら全てが同じように乱れ、歪んでいく。始めにその影響を受けたのが音楽だった。音楽は心を癒すものから、心を壊すものへと姿を変えた。次

は私たち人間の番だ。特に私たちのように音楽に敏感な者は影響を受けやすく、体内の調律が乱れやすい。中には極度の苦痛を伴いながら死んでいく者もでてくるだろう」

トーンは口が渴くのを感じていた。そう、あのときはいつものようにいつもの場所で、ビオラと音楽の練習をしていた。コントラスから聞こえてくる機械の音から逃れるように、下流へと移動していった。ようやく音が聞こえなくなり、練習を始めようとした矢先、ビオラは倒れた。これまで見たこともないほど顔を歪め、苦しそうに胸を強く掴んでいた。滝のような汗が全身から流れだし、まるで燃えているように体が熱かった。医者に診せても一向によくならず、トーンがオカリナを吹いたときに初めて、表情が落ち着いたように思えた。

それと全く同じ事が、さっきの事件でも起きていたじゃないか。でも、そんなふざけた話があるか？ たとえ真実だとしても信じられるわけがない。つまりビオラは、音楽を心から愛した少女は、その愛した音楽によって殺されたというのか……。

堰を切ったように溢れ出した涙を、トーンは抑えることができなかった。真実がわかり、何とも皮肉な現実を突きつけられ、締め付けられるように胸が苦しくなった。このことを知っていればもっと何かできたかも知れないと思うと、ただ辛くて悔しくて、自分が無知であることを呪った。ただ死ぬ間際の彼女の表情が、苦痛ではなく安息の色を浮かべていたことだけが、心の救いだった。

ウィンドの手が優しくトーンの肩に回される。そのままぎゅっと顔を胸に押しつけられ、暖かいウィンドの胸の中で、トーンはむせび泣いた。ウィンドは誰にいうでもなく、口を開いた。

「私も昔は吟遊師団の一員として、様々な場所で様々な人に、それこそ機械派、音楽派に関係なく、音楽を演奏して回った。聞く人がみな、演奏の後には拍手を贈ってくれ、安らぎを手に入れて去っていった。しかし私は、やがて時が経つにつれて音楽がおかしくなっていることに気付いた。それが、機械のせいであることも」

落ち着きを取り戻し始めたトーンは、ウィンドの話に耳を傾けた。

「機械塔設立のパーティーに吟遊楽団が招待されたとき、私は猛反対したよ。必ず良くないことが起こるという確信があった。だが音楽を愛し、人を愛した一人の青年は、『音楽を演奏して少しでも喜んでもらえるなら』といって聞かなかった。私たちは仕方なくパーティーに招かれ、演奏した」

そして、壊れてしまった。というウィンドの声は、非常に重たく、陰鬱だった。

「きつと彼は、ずっと前から空氣の調律の変化に気がついていたのだろう。演奏も素晴らしかったが、とりわけ音に対しては誰よりも敏感だった。自分の奏でる音楽で、人の心だけでなく、空氣の調律さえも癒してあげたい……そう思っていたのかも知れない」

「まさか、僕はそんな善人じゃないさ」

背後から声が聞こえてきたかと思うと、突然衝撃波がウィンドを襲い、トーンを通り越して木の幹に勢いよく吹き飛ばされた。トーンが振り返ると、そこにはあの巨大な鏡に映し出された人物に非常によく似た男がこちらを見ていた。

「久しぶりだね。随分ふぬけちゃったみたいじゃないか」

男は不吉な笑顔をウィンドに向けた。ウィンドは痛みにつめきながらも、木の幹で体を支えながらなんとか立ち上がり、男の顔を正面から見つめかえた。

「随分なご挨拶じゃないか。リード、ずっと心配していたんだぞ」

トーンはぎょっとしてリードと呼ばれた男の顔を見た。この男が、リード・メロディオン。今回の事件を引き起こした、張本人……。何を心配する必要があるのさ。君が思っていることをしようとしているだけじゃないか」

そういつて、リードはふふつと笑った。

「僕はこの大陸を救う。人々が汚した音楽を使って」

「お前がしていることは、ただの人殺しだ」

リードが高らかに笑い声を上げた。

「人殺し？ まさか、僕は大陸を汚染するものを排除しているだけさ。君もいつていたじゃないか。機械は人を殺すって。このまま放置すれば、僕たちだけじゃない。全ての人が死んでしまう」

ウィンドは食いついた。

「音楽は罰するものじゃない。救うものだ。殺しの道具に使えば、それこそ機械と何もかわらない」

トーンはその言葉にはっとし、慌ててリードに傾きかけていた気持ちを振り払った。ビオラは何といていた。音楽は人の心を癒すものであり、人の心を素晴らしいものにするといいはずだ。全てを壊すことだけが全てじゃない。

トーンはその気持ちを心に固めるかのように、大きな声でいった。「美しく人の心に響く音楽が、大切な人が何より大事にしていたものだ。その音楽を汚し、別のものに変えてしまうというなら、僕が何としても止めてやる。絶対に」

一瞬、リードが寂しそうな表情をしたように見えたが、足下にあった草をきれいにむしり取り「好きにすればいいさ」といって草笛を吹いたときには、もうリードの姿はどこにも見えなくなっていた。リードが立っていた場所を、トーンは穴があくほど見続けていた。背丈格好をしっかりと頭にしたき込み、決して忘れないよう何度も顔を思い浮かべた。薄い夕焼けの色をした短い髪、月の光に淡く照らされた端正な顔立ち、優しそうな表情とは裏腹な、真実を決して見落とさないといったような冷たい瞳を、決して忘れることがないように……。

トーンはオカリナを取り出した。ビオラを失ってからもう一年近く経つが、あのと全く変わらない白と緑の縞模様がそこにあった。風に共鳴するように微かな音が流れ出す。耳に心地よい、暖かな音だった。トーンは心の中にいるはずのビオラに向かって一人ごちた。

「もう一度、君のためにオカリナを吹こうと思うんだ」

ビオラを救うことはできなかった。だからこそ、ビオラの心だけは救いたい。音楽の持つ表と裏の顔を知り、その力を知った。トーンはもう昔のような無知な少年ではなかった。

トーンはオカリナを吹いた。忘れているかと思ったが、体が全て覚えていた。昔、ビオラと川のふもとで練習していたように、夜の池や木々と共にアンサンブルを奏でた。隣で、一緒にビオラが演奏しているような気がした。ウィンドがホルンを取り出し、トーンに音を合わせる。眠っていた動物たちが目を覚まし、夜の大合奏に耳を傾けた。美しく晴れやかな合奏が、夜の森を包んでいた。

第四章：進むべき道

第四章　進むべき道

雲一つない青い空が、一行の門出を祝うかのように広がっていた。町の入り口にはすでに守備兵が旅支度を済ませ、新たに仲間となる二人の準備が終わるのを待っていた。

「逃げ出すんじゃないかと思っていたがな」

そう口にしたミンスの目を、トーンは新たな決意を秘めた目で見つけ返した。

「いい目をしてる。それが私たちの力になってくれることを信じているよ。さて、出発する前に一つ、君たちに身につけておいてほしい物がある」

そういつて、ミンスは後ろに待機させていた守備兵を二人呼び寄せて何かを受け取ると、二人に渡した。小指の先ほどの小さな黒い塊のようなもので、触ってみるとざらざらした感触がある。

「耳にいれるんだ」

二人は大きく目を見開いた。ミンスはにつこりとした表情を全く変えずに二人に頷いて見せた。トーンは思わず問い返した。

「な、なにをするって……？」

「耳にいれるんだよ。こんな風に」

ミンスが右耳にかかっていた髪をかきわけ、耳に入っている同じ黒い塊を見せた。髪を戻し、何も心配はいらない。と付け加えた。

トーンとウィンドはお互いに顔を見合わせ、恐る恐る耳に入れた。風が通るような、すーっという音が聞こえてくる。話し声もしつかり聞こえるようだ。異物感がある他には特に変わった様子はない。わずかに頭が冴えたように感じる。いや、違う。なんだか十分な睡眠を取った時のような、すがすがしい気分になってきた。しかし無邪気に驚くトーンとは裏腹に、ウィンドは何かを考えているように

顔をしかめていた。

「どうだ、だいぶ気分が良くなったんじゃないか？」

「一体何をした」

棘のあるウィンドの声に、ミンスは小さくため息を漏らす。

「別に悪さしようというわけではない。それはNoise Reduction and Carvingといって、超小型のコードレス型イヤホンになっている。通称NRCと呼ばれているそれは、人間の耳には聞こえない、又は気分を害するような音がある程度遮断する効力がある。また耳の情報から体の健康状態を検知し、体の不調を和らげる薬を投与する機能も持っている。もし昨日眠れなかったのなら、十分眠った後のように頭がすっきりしているはずだ」

まさしくその通りだ。とトーンは頷いた。

「それだけじゃない。こんなことも可能だぞ」

ミンスがくすつと笑い、こちらの反応をうかがいながら右耳に手をあてて小声で何か話し始めた。すると突然、NRCと呼ばれた物を入れた耳からミンスの声が聞こえてきた。トーンは右に、ウィンドは左に思わず振り向き、お互いの顔を見合わせて恥ずかしそうにははつと笑った。

「NRCを軽く抑えながら話しをすれば、声の振動が手を伝わり、NRCを身につける全ての者に声を送ることができる。これがあれば当分の間は空気の調律が乱れた場所にいても、長い時間滞在できるはずだ。まあ、あくまでも応急処置に過ぎないがな。たった一日で作ったにしては、いい出来だろう」

どうやら、昨日の事件と聞き出した情報をもとに作り出したものらしい。ウィンドも驚きを隠せない様子だった。機械のはずなのに、それを全く感じさせない。

こついつものも、空気の調律を乱す原因になっているのだろうか。

「少しは長く、生きていられるかもしれないな」

そついつウィンドの声は、どこか嬉しそうだった。

一行は、瓦礫の山と化したコントラスを超え、東にあるバンジョーへ向かった。コントラスに足を踏み入れたとき、トーンとウィンドはすぐに空気の異様な変化に気付いた。侵入者をその地に引きずり込むようなねっとりとした感覚が全身にまわりつき、一歩進む度に体が重くなっていくように感じられた。NRCを装着していなければ、今頃瓦礫の一つとなっていたのではないかとトーンは思い、落ちてしまわないように耳を押さえながら歩いていた。

バンジョーに着くとすぐに待機していた守備兵が現れ、ミンスに早口で報告を済ませた。どうやら昨夜のうちにここでリードらしき人物を目撃したという報告があつたらしいが、それ以降姿を見た者は一人もいないらしい。まずは情報を整理するためにミンスは側近の守備兵を連れてバンジョーの機械警察支部へと向かい、他の者はひとまずホテルで待機ということになった。

ホテルに向かうまでの間、トーンは所狭しとそびえ立つ壮大な建物に目を向けていた。今にも空を突き破ってしまいそうなくらい高い建物や、いくつもの四角や丸で構成された建物、縦に長いドーム型の建物の上に輪を描くように複数の大きな玉が乗った奇妙な建物など、見たこともない巨大なものがあちこちに広がっていることに少なからず興味を覚えたが、これらが全て機械で作られたことを思うと、いらだちを覚えずにもいられなかった。しかし何よりも驚いたのは、これでもかというほどのたくさんの守備兵の存在だった。一分に一回はどこかで守備兵の姿を見かけ、道行く人に何かを聞いている者もいれば、忙しそうに走り回っている者もいた。大きな町ほどたくさんの守備兵が警備していると聞いたことがあるが、まさかこれほどまでとは。もっと大きな町では一体どうなってしまうのだろうか。

ホテルで一行が通された部屋は、守備兵さえも感嘆のため息を漏らすほど豪華だった。十人ぐらいは余裕で入れそうなほど広い空間が広がり、四隅に置かれた傘つきの証明が淡い光を部屋全体に落としている。二つ並べて設置された幅広のベッドにはシルクの布団が

かけられ、窓から差し込む光で黄金色に輝いていた。ガラス戸の先には小さなテラスがあり、そこからバンジョーの半分は見渡せるのではないかと思うほど壮大な景色が広がっていた。

「しばらくはここで監視を続けることになった」

部屋にやってきたミンスが、全員を集めて説明を始めた。

「未だにリードの居所はつかめていないが、先ほどの町にもコントラスと同じ、異常なまでの低周波が流れていることがわかった。被害は出ていないようだが、今後何が起こるかかわからない。トーンとウインドには低周波の発生源を調査してもらい、他の者はここから町の監視を行ってもらおう。まともな機材がなくてすまないが、人力で頑張ってくれ」

「あれだけの守備兵で見つからないのなら、もうここにはいないんじゃないか？」

ウインドの問いに、ミンスが頭をかきながら答えた。

「確かに今は通常の三倍の兵で町の調査にあたっているが、いかにせん手作業でな。これまで機械に依存してきた私たちにとっては、未だに調査の手が伸びていない地区があるほど警備体制も動く者も上手く機能できていない。それに他に情報がない以上、ここを離れるわけにもいかないんだ」

「探すとはいつでも……」

トーンが不満そうに口を開いた。

「これだけ広いと、何日あっても探しきれないよ」

心配ない、というようにミンスは頷くと、テーブルの上に一枚の大きな地図を広げた。

「バンジョーは東西南北で地区が分かれているんだが、特に西地区全体で異常が確認されている。ホテルを出て左側の道沿いを歩いていけば看板があるから、そこまで行けばあとは看板の示す道を進んでいけば着く。心配なら守備兵を一人案内役として連れて行っても構わないが？」

「大丈夫だ。二人で行ける」

トーンはウインドに怪訝な表情を浮かべたが、答えが返ってくることはなかった。

「何故せつかくの案内を断ったんですか？」

次の日、朝食を済ませたトーンとウインドは早速西地区へと向かっていった。

「朝昼晩ずっと監視されてると思うと、頭がおかしくなりそうだからな。それに……」

ウインドの視線の先に、西地区と書かれた矢印形の看板が見えた。「案内されるまでもない」

しかし西地区に入ってから何時間か歩き回ったが、収穫は全くといっていいほどなかった。微妙な変化ではあったが空気の流れがおかしいことには気付いていた。流れを辿っていこうと試みたが、途切れ途切れになっていて上手くたぐり寄せることができずにいた。流れているというより、その場に漂っているみたいだ。ウインドが風の音に耳を傾けてみても、高層住宅が立ち並んでいるせいか上手く音を聞き取れないでいた。

諦めて戻ろうとした矢先、ふとどこかから何かを叩くような音が聞こえてきた。中通りの途中、建物と建物の小さな隙間の先に、古ぼけた建物があるのを見つけた。先ほど反対側を歩いたときは気付かなかったが、建物の見える方向から奇妙な音が聞こえてくるのがわかる。

隙間を抜けてすぐ、二人は異常な低周波の原因がなんであるかを理解した。起動停止命令を受けたはずのオートマシンや、機械音をまき散らしながら活動する機械が当たり前のように使用されていたのだ。頭に突き刺さるような音が次々と二人に襲いかかる。気分が悪くなってきたウインドは町に戻ろうと後ろを振り返ったが、そこで予想だになかったものを見た。

がっしりとした体格の男が三人、不気味な笑みを浮かべながら隙間をふさぐようにして目の前に立っていた。構わずに間を抜けてい

こうとしたウィンドが、真ん中のはげた男に腹部を思い切り殴られ、倒れそうになったところにさらにさらに蹴りを入れられて、トーンの隣まで吹き飛ばされた。

「おい、何するんだ！」

トーンが慌ててウィンドを抱き上げると、額に汗が浮かんでいるのが見えた。苦しそうな表情は、殴られたからだけではないことをトーンは十分承知していた。

「頼むからそこをどけてくれ。仲間が苦しがつてるんだ」

全身毛むくじやらの男が口を大きく開けて笑った。

「何言つてやがる。生意気なくそガキが」

「こいつら、ここのもんじゃねえな」

レンズの片方がすすこけた眼鏡をかけた別の男が、トーンの服装に気付いて眉をひそめた。「最近守備兵が増えたことと何か関係があるかも知れねえ」

「おいおいまじかよ」はげた男が慌てた口調でいった。「ここが知れたら、俺たちの苦勞が水の泡だ。相手はたかが二人だ。殺っちまうか？」

三人が討論を続けている間も、ウィンドの容態は悪くなっていく一方だった。トーンはあることに気付いて耳を押さえると、様子を見計らって小さく口を動かした。

「ち、このくそガキ！」

トーンの行動に気付いた毛むくじやらの男がトーンを地面に叩きつけたが、思い切り振り下ろされた足はトーンの体を避け、服を踏みつぶした。その拍子に、何かが碎ける音が聞こえる。

トーンはがばっと起きあがってポケットの中身をのぞき、震える手の中にあるものを取り出した。

「そんな……嘘だろ……」

手のひらには、粉々になったオカリナの木くずだけが乗っていた。はっと、もう一方のポケットに手を回した。布越しにオカリナの形を感じて、ほっと胸をなで下ろす。家から持ってきた形見のオカリ

ナは、幸い壊れてはいなかった。

「今度おかしな真似してみる。今度はぶち殺すからな！」

「誰を殺すって？」

それは、ミンスの声だった。

「私の客人が迷惑をかけたみたいで、すまなかったね。よければ返していただけるとありがたいのだが？」

ミンスの胸元に取り付けられた徽章を見て、はげた男が目を大きく見開いた。

「ち、守備兵隊長直々におでましくてか」

「ふざけるな！」眼鏡の男が叫ぶ。「あんたもこいつらも、ここを見ちまった以上生きて返すわけにはいかねえんだよ」

「起動停止命令に反する機械の使用及びオートマシンの無断利用とその隠匿行為。君たちの残りの人生をオリの中で過ごさせるには十分すぎるくらいだな。今すぐその二人をこちらに引き渡し、使用している全ての機械を停止させれば、今回のことは見なかったことにしてやる。どうだ？」

男たちは何もいわず、困惑した表情を浮かべてミンスを見た。それを了解と受け取り、ミンスは足早に倒れているウィンドのもとへ行き、続けてトーンを見た。唇が切れ、口から血が流れている。

「立てるか？」

トーンは小さく頷き、ウィンドを担いで歩き出すミンスの後をついていった。

「汚ねえぞ……くそ！ 機械が無くなったら、これから俺たちはどうやって食っていきやいいんだ！」

隙間を抜けて中通行に出る途中、男の悲痛に満ちた叫びが聞こえ、その言葉がトーンの頭の中で何度も反芻していた。

「……おかしいな」

ミンスが言葉にしなくとも、誰もが思っていることだった。トーンとウィンドがああ町を見つけてからもう一週間近くが経つが、全

くといっただけいいほど何も起きていない。結局低周波はあの町で使用されていた機械を止めたことで解決され、それ以降何も新しい情報は入ってこなかった。

すっかり回復したウィンドがずっと思っていたことを口にした。

「リードがいたという情報自体、嘘だったんじゃないのか？」

「NRCを介しての報告だったんだ。やろうとしてできることじゃ

—

ミンスははつとして口に手をあてた。

「まさか、囧……」

次の瞬間、耳元でミンスの予感的中させる声が響いた。

「守備兵に伝令！ クラッパー並びにシタールの機械警察支部に保管されていたオートマシンが暴走、町で破壊活動を行っている！

近くにいる者はただちに救助に迎え！ 同時刻に不審な音楽が町中に鳴り響いていたことから、リードがまだ近くにいる可能性も高い。発見次第ただちにNRCにて報告せよ！ 繰り返す……」

声の裏側からは何かが破壊される音や悲鳴のようなものが聞こえていた。

「くそ、やられた！」

ミンスが手に持っていた双眼鏡を地面に叩きつける。

「ここから近いのはどっちだ？」

「シタールなら半日で着きます」守備兵の一人が答えた。

「よし、全員すぐにシタールへ向かうぞ。トーンとウィンドも一緒にくるんだ。音による攻撃は私たちでは無力に等しいからな」

トーンはこのとき、緊張と同時に恐怖も感じていた。肩の傷がうずく……。肩を貫かれたときの、あの人殺しを楽しむかのように笑うオートマシンが頭から離れなかった。ウィンドがトーンの肩に優しく手を置いた。

「機械の暴走は、空気の調律の乱れが引き起こした二次災害だ。その乱れを直すには何が必要だ？ オートマシンが動きを止めたあの時、何が起きていた？」

はつとして見上げたトーンに、ウィンドはにっこりと笑顔で言った。

「私たちの力を、リードに見せつけてやろうじゃないか」

シターンに着いたときは、もう町の半分近くが瓦礫と化していた。あちこちで火の手が上がり、破壊音や悲鳴が止むことなく聞こえてくる。ミンスがNRCを通して到着の報告と共に次々と簡潔明瞭に指示をまくし立てる。守備兵が千々に散らばっていく中、ウィンドとトーンも準備を始めた。

ホルンの音を調整しながら、ウィンドは眼前に広がるシターンを眺めて言った。

「届くと思うか？」

トーンがポケットからビオラの形見であるオカリナを取り出す。まさか、これを使うことになるとは思ってもしなかった。ただ、自分と一緒に結末を見て欲しいと思っていただけだった。壊れてしまったオカリナに対しては未だに悔しさと憤りを感じていたが、今はそれに気を取られている場合ではないこともわかつている。

「美しく調和する音楽は、宇宙までもその音を届けることができる」と、何かの本で読んだ覚えがあります」

ウィンドがにやりと笑った。それに答えるように、トーンも笑みを浮かべた。楽器を口に当てるときも、その笑顔が無くなることはなかった。

命を吹き込まれた楽器は、示し合わせたかのように同時にその美しい音色を奏で始めた。ホルンの音とオカリナの音が絡み合い、吹きすさぶ風に乗ってさらに遠くへと飛ばされるその途中で、風の音と砂の擦れる音、何かと何かがぶつかる音とも絡み合い、音楽をより賑やかなものにしていく。オートマシンの隙間をすり抜け、歪んだ調律を元に戻して複雑に絡み合い、やがて音だけのオーケストラとなってシターン全体に広がっていった。ウィンドとトーンは決して休むことなく、例えば小石が当たろうと、砂が目に入ろうと楽器

を演奏する手を止めようとはしなかった。

二人のもとに向かつていたオートマシンが徐々に動かなくなり、やがてぱったりと動かなくなった。人々を襲い、町を破壊していた他の機械もすぐに動かなくなった。燃え上がる炎はその勢いを抑え、人々は逃げることも忘れ、どこかから聞こえてくる美しく賑やかな音色に耳を傾けた。ミンスや守備兵たちはみな、呆然とその様子を眺めていることしかできなかった。

何時間経過しただろうか、シターンはすっかり静けさを取り戻していた。まだ音楽が響き渡る中、守備兵が生き残った人々を無事に保護し、救助活動を始めていた。ミンスが現状報告を済ませようとNRCを使用したとき、ウィンドとトーンは突然耳に入ってきた音に驚き、危うく楽器を落とすところだった。二人とも全身に玉のような汗をかいていた。胸がふくらむほど大きく息を吸い、大きく息を吐いた。静かになったシターンを眺め、顔を見合わせてトーンは大きな歓声を上げた。

ミンスが拍手をしながら近づいてきた。

「驚いたよ。本に出てくる魔法使いみたいだった」

ウィンドが肩をすくめる。

「楽器を吹いただけだ」

「報告します！」

NRCからの声だ。

「クラッパーにて、暴走した機械の鎮圧に成功しました。町も半分以上がまだ生き残っています。現在救助活動中。繰り返します……」
ミンスがほっと安堵のため息を漏らした。しかしつかの間の喜びも、慌ててミンスの元にやってきた守備兵によって打ち捨てられることとなる。

「大変申し上げにくいのですが……」

守備兵は一息ついてからいった。

「支部に保管していた鍵が……無くなってしまいました」

トーンにはそれがどんな意味をさすのかわからなかったが、ミン

スは頭を殴られたような衝撃を受けていた。

「最後に管理していたのは誰だ？」

怒りのこもった問いに、守備兵は怯えながら答えた。

「私です。しかし突然のことで慌てて避難してしまったもので、鍵は……」

ミンスが守備兵の胸ぐらを掴む。

「何故持つて避難しなかった？ あれがもし盗まれたりでもしたら

」

胸ぐらを掴んでいた手の力が弛むと同時に、ミンスは蒼白な表情を浮かべた。守備兵が苦しそうに咳き込む。

「まさか……」

ミンスは近くの守備兵にコントラスで保管されているはずの鍵について調査記録を調べさせ、小型電話機を受け取ってクラッパーに連絡を取った。話しを進めていく内に、より一層顔が青白く変わっていくのが二人にもはっきり見て取れた。しばらくして電話を切り、守備兵から結果を聞き終えると、ミンスは驚くような一言を口にした。

「リードの目的がわかった」

しかし、二人は全く話しの流れが理解できないでいた。ミンスは二人にわかるよう、ゆっくりと順序立てて説明した。

「いいか、まずリラという楽器を知っているな？ ダイアグラム大陸を死の大陸から復活させた伝説の吟遊詩人が使っていたとされる楽器だ。それが、パンの機械警察省本部の倉庫で厳重に保管されていることも、知っているな？」

トーンが頷く。ウィンドは表情も変えずに黙っていた。

ミンスは続けた。

「リラを取り出すまでには、全部で六つの鍵を開けなくてはいけない。大陸全体でそれを管理しようと、六つの町で一つずつ鍵を保管することになった。それが、コントラス、シターン、クラッパー、西の山を越えた先にあるコルペット、大陸の中央にある一番大きな

町ミルリトン、吟遊詩人の住む町メトラだ」

トーンは驚いてウインドの顔を見たが、その表情には何も映っていないかった。まるで全てを知っているような、そんな予感さえ感じられた。

「そのうち三つの町が襲撃を受けた。しかしここで不自然なのが、目撃情報がありながら襲撃を受けなかったバンジョーだ。バンジョーには鍵が保管されておらず、これまで襲撃された三つの町全てで保管されていた鍵が行方不明になっている」

ウインドが初めて口を開いた。

「リードは鍵を狙って警備を攪乱するためにバンジョーに訪れ、手薄になったクラッパーとシターンを襲い、両方の鍵を手に入れた」
たんとたと話すウインドに、トーンは違和感を覚えずにはいられなかった。

「確証はないが、それ以外には考えられない。リードはリラを手に入れて、何かを起こそうとしているんだ」

ミンスは機械警察省に連絡を取って鍵がなくなったことと、鍵こそがリードの狙いだろうと報告し、各支部に鍵の警備を強化するよう伝えた。遠くから救助活動に励む守備兵の声や瓦礫の崩れる音が聞こえてくる。トーンは持っていたオカリナをしまい、自分の手で救った町を見渡した。ビオラは見えてくれただろうか。なぜ私は助けられなかったのかと怒ってはいないだろうか。空を見上げると、天辺に昇った丸い月が淡く輝き、それに呼応するように見たこともない数の星がきらきらと瞬いていた。

戦いはこれからだ。きっとビオラは笑って見えてくれるだろうと、トーンは思っていた。

第五章：迫られる選択

第五章 迫られる選択

トーンは突然の物音に目を覚ました。

暗くてよく周りが見えなかったが、横になっているベッドは、
シターンに宿を取ってついさっき眠りについたベッドと全く同じだ
った。

部屋が異常に寒く感じたが、よく見ると部屋の窓が開いていて、
それが外からの風を受けてがたがたと音を鳴らしていた。

ベッドから起きあがり、冷えた体をさすりながら窓を閉めて鍵をか
ける。

もう一度寝ようと振り返ったとき、
視線の先にうつすらとあるはずのない影を捉えてトーンは心臓が飛
び出しそうになった。

月明かりに照らされた薄い夕焼け色の髪を、
トーンはどこかで見た覚えがあった。

「また会えたね」

少し高い幼さの残るような声……
それは、ウィンドと一緒にメトラの池のほとりで聞いたときの声
と、全く同じだった。

「リード……」

自分の名前が呼ばれるのを聞いて、リードは小さく微笑んだ。

「嬉しいな、覚えていてくれたなんて」

まるで何年も会っていない友達がいうような言葉に、

トーンは目の前の男が一瞬本当にリードかどうか分からなくなった。

リードという青年は、コントラスを壊滅に追いやり、

クラッパールとシターンの暴走を起こした張本人だったはずだ。

実際池のほとりで襲われた時は、

機械への、機械を使用する人間への恨みや憎しみに溢れていた。

しかし目の前にいる人物は、

名前を覚えられていただけで子供のように無邪気な笑顔を浮かべている。

まるで同一人物とは思えなかった。

NRCを介して会話をすればすぐにでも誰かがきて、
リードは取り押さえられて事件は解決するだろう。

しかしあのときからずっと頭のすみに残っていた思いが、トーンに
そうさせなかった。

「……一体何のようだ。何をしにきた」

「そんなに構えないでよ。別に争いに来た訳じゃないんだ。
振り回される君があまりにもかわいそうだったから、

力になつてあげられないかと思つてね」

トーンが顔を歪ませる。

「別に同情される覚えもないし、力を借りる筋合もない」

「ダウントウンで壊されたオカリナ、大切なものだったんでしょ？」

トーンは目を大きく見開いた。

ダウントウンでの一件を知っているのは、ウィンドとミンス、それに三人の男だけのはず。

どこかで見ていたとしても、リードも吟遊詩人だ。

あの環境下でまともにいられるはずがない。

ウィンドはどうやってホテルに戻ったのかすら覚えていなかったのだから。

そんなトーンの様子に気付いたのか、リードは軽く笑みを浮かべていった。

「君がオカリナを初めて吹いた頃から知っていたし、ダウントウンに迷い込んだ時のことも、この町を救った時のことも知ってる」

トーンのいぶかしげな視線に気付き、リードは言葉を切った。しかしあまり長い時間話しをしている暇もなさそうだった。風がざわついている。

「詳しいことは、また今度話すことにするよ。時間もあまりなさそ

うだし」

「このまま、何事もなく帰れると？」

「帰れるよ。僕の話聞けば、君は何もできなくなる」

「まさか」

トーンは鼻で笑ったが、内心は不安でいっぱいだった。

池のほとりで襲われるまでは一度も会ったことも聞いたこともなかった男が、

自分が音楽を始めた時から知っているという。

オカリナを壊されたことを知っている以上、冗談でいっているとも思えなかった。

もしかしたら、自分も知らない何かを知っているのかもしれない。そんな気持ちさえしていた。

「もう知ってると思うけど、僕は鍵を探している。
残りは三つ。」

どこにあるかはもうわかってるんだけど、どうにも僕一人じゃ難しそうなんだ」

トーンは肩をすくめた。

「ばかばかしい。いや、話を聞いた僕がばかだったよ。
大体協力して何の得があるっていうんだ」

「大切な人を、生き返らせてあげることができる」

時間が止まったかのように、トーンは目を丸くしたままその場に立ちつくしていた。

確かめるように、頭の中で今の言葉を何度も繰り返す。

追い打ちをかけるように、リードは言葉を継いだ。

「リラには、命を紡ぐ力が込められているんだ。

君は、何故大切な人が死んだのか、もう気付いているんだろう？
この大陸を元の姿に戻して、機械に苦しむ人々を助けてあげたい
とも思ってる。

機械がある限り、本当の幸せはやってこない。
現実を見てよ。

機械は君に、君の周りに幸せを届けてくれたかい？

他の方法なんてない。

機械を葬り去ることだけが、この大陸を救う唯一の方法なんだ。

でもそれを実現するためには、君の素敵な音楽がどうしても必要
になってくる。

もし後ろめたさを感じているなら、それは逆だよ。音楽は人を救
うものなんだよ。

それなのに、人を苦しめる側に味方する方が音楽を汚していると
は思わないのかな。

君の力で、音楽を本当の姿に戻してあげようよ。

蘇る大切な人への帰ってきた贈り物としてさ」

トーンは胸が高鳴るのを感じていた。

死んだ人間が生き返るはずなどありえない。

しかしリラが死んだはずのダイヤグラム大陸を生き返らせたという
のなら、

不可能ではないのかもしれない。

それに、機械がなくなれば母の苦しむ姿ももう見なくて済むのだ。

「答えは今じゃなくていいよ。

君が決断したとき、またやってくるから。良い答えが聞けるといいな」

そういつてリードは暗闇に隠れたかと思うと、いつのまにか音もなく姿を消していた。

窓が風を叩く音が聞こえる。

トーンにはまるでそれが、

現実という世界に閉ざされた自分を助け出そうと呼びかけているように聞こえていた。

ビオラが少し先を歩いている。

腰まで伸びた赤い髪は相変わらずで、

風に揺れる度に川のせせらぎが聞こえてくるようだった。

笑顔でこちらを振り返り、早くおいでよと手招きをして見せる。

しかし走り出そうとしたとき、突然彼女の腹部を何かが貫いたかと思うと、

口から血を吐き出して力なくうなだれ、ずるりと落ちて地面に消えていった。

その先には、メトラで自分を襲った、あのオートマシンの姿があった。

あのとときと同じように、あざ笑うかのように顔を上下に揺らして…。

トーンはがばつと起きあがった。

辺りを見渡すと、何も変わらないシターンの寝室が目に入った。全身にあふれ出した汗で服が体にまとわりつく。

「夢……か……」

トーンは両手で顔を覆った。

あふれ出す涙は、それでも抑えることはできなかった。

次の日の朝、メトラにも保管されているという鍵の所存を調べるために、

一行は一旦メトラへ戻ることになった。

昨夜の一件については、誰も気付いてはいないようだった。

トーンの目が真っ赤になっていたことも、

ウィンドがただ一言「大丈夫か？」といったただけだった。

隠し事をしている自分が恨めしかったが、驚いてもいた。

昨夜のことを告げれば、きっとすぐにでもリードを捕まえられ、多くの人々を救うことができる。

でも、本当に助ける必要があるのだろうか、

本当にそれが正しいのだろうかと考えている自分に……。

自分と呼ぶ声に、トーンははつと我に返った。

ミンスがため息をついていった。

「疲れていると思うが、ゆっくり休ませることもできなくな。さて、聞いていなかったようだからもう一度聞くが、トーンはメトラに保管されていたという鍵について、何か思いあたるようなことはないか？」

思い当たるどころか、トーンはこれまで鍵の存在自体聞いたことがなかった。

「ウィンドはどうだ」

「初耳だな」

ウィンドは外を眺めたまま簡単に答えた。そもそもメトラにあるということ自体、誰かが陥れるためについた嘘なのではないだろうか。

しかし、ウィンドはそう思っていないようだった。

「リードの住んでいた家なら知っているぞ」

なんとなくすごい家を想像していたが、着いてみるとなんてことはない普通の二階建ての民家だった。

長い間誰も住んでいなかったようで、窓は中の様子が確認できないほどにすっかり汚れていた。

ミンスが扉を押し開け、様子をうかがいながら中へと入っていく。トーンは一度外を見渡してみたが、真夜中だったおかげで誰かに見つかるようなことはなさそうだった。

建物の中は非常によく整理されているように見えた。
木製のテーブルの上に置かれた空のティーカップだけが、
ここに人が住んでいたことを示していた。

ウィンドが口を開いた。

「私とトーンで一階を調べるから、ミンスは二階を頼む。

二階はそれほど広くなかったはずだから、一人でも十分だろう」

ミンスが辺りを見渡しながら答える。

「それはいいが、階段はどこだ」

「その扉を開ければ、隣に見えるはずだ」

ウィンドが指さした扉の隣に、一枚の大きな写真が飾られてあつた。

楽器を持った男が四人並んで写っていて、足下には「親愛なる仲間たち」と書かれている。

ホルンを持っている男は、どことなくウィンドの面影がある。

ミンスが扉を開けて階段に気付くと、

おかしな真似はするなよと釘をさして二階へと上がっていった。

「さて、私たちも始めるか」

トーンはふと、疑問に思ったことを口にした。

「ここに鍵が？」

「わからんから調べるのさ。私は右の部屋を調べるから、トーンはここを頼む」

小さくため息をついて、トーンは自分の調べる場所をもう一度見渡した。

きれいに片付けられた台所に、中央にティーカップが置かれた木製のテーブル、壁沿いに立てかけられた背の高い棚には、音楽の本が敷き詰められている。

何かを隠せるような場所は特に見当たらない。

台所へ行き、手当たり次第引き出しの中や棚の隙間などを調べてみたが、見つかったのは折れ曲がったスプーンと先が欠けたさいばしだけだった。

棚の本も全て取り出し、棚自体も、本も一冊一冊調べてみたが、途方のない数に途中で投げ出してしまった。

本を再び棚に戻そうとしたとき、ふと一冊の本の表紙が目がいった。

紫色や白色の四枚の花びらが密集した花が描かれていて、その下には手書きで「リラ」という文字が刻まれている。

名前が妙に引っかかってめくってみると、そこには表紙の花の絵ではなく、

何度か別の本で見たことのある、伝説の詩人が使っていたといわれているリラの絵や説明が書かれていた。

『中空の共鳴箱からなるフレームは、自然界に存在する様々な音と共鳴し、

より豊かで生き生きとした音楽を生み出すことができる』

『リラの本質は美しい音楽を紡ぐための構造ではなく、響き渡る音楽そのものに存在する』

これほど詳細が書き込まれた本は見たことがなかった。

しかしパラパラとめくってみると、実際に使われているのは初めの十ページほどで、

残りは紙ではなく固い白い箱のようなものが取り付けてあっただけだった。

真ん中にくぼみがあり、何かが入っていた形跡があったが、それが一体何なのかトーンには見当がつかなかった。

再び棚に本を戻していたとき、隣の部屋から自分を呼ぶ声が聞こえてきた。

トーンが部屋に入ったとき、

ウィンドは天窓から差し込む光に照らされるようにして置かれていた小さめのテーブルの前に立ち、一つの写真立てを手に取って眺めていた。

そこから振り向くことなく、突然ウィンドが問いかけてきた。

「君は、リードに会ったことがあるのか？」

トーンはぎくりとしたが、穴が開くほど写真を見つめるウィンドを見て、

とつさに話題を変えようと口を開いた。

「その写真に、何か書かれていたんですか」

「この女性に見覚えはないか？」

手渡された写真を見ると、

三十歳くらいの女性が幼い男の子と女の子を両腕に抱えるようにしている姿が写っていた。

しかし女性には全く見覚えがなかった。

頭の中に残っている記憶を掘り出してみても、思い浮かばない。

「大人の方ではないぞ、手前の子供の方だ」

まだ七、八歳くらいの少年と少女が女性の腕を片方ずつ抱くようにして、

満面の笑顔でこちらを見ている。

ふと、トーンは何か引つかかるのを感じた。

別におかしいというわけではない。

ただ、何か引つかかる。

一体何が

初めに気付いたのは、男の子の方だった。

つい数時間前に暗闇にうつすらと見えた微笑んだ口元と、全く同じだったのだ。

だが別に驚きはしなかった。

リードの家だというのだから、幼い頃の一枚や二枚飾られていても何もおかしくはない。

問題は、ウィンドのいう少女の方だった。

見たことがない。そう信じたかった。

自分の頭で考えていることが嘘であってほしいと願った。

しかしどれだけ呼び覚まされる記憶を振り払おうとしても消えることなく、

やがて様々な思い出がトーンの頭の中に溢れ出した。

「ビオラ……」

「やはりそうか」ウィンドが写真立てを奪い取る。

「ビオラ・メロディオン。彼女の音楽は私も聴いたことがある。

純粹で透き通った美しい音だった。

もちろん、君と一緒に演奏していたことも知っている。

彼女が亡くなったとき、君がそれを見届けたことも。

しかしどうやら、君は彼女の兄が誰であるかを知らなかったようだな。

それは何故だ？

彼女の姓を知らなかったのか、それともただ知らない振りをしていただけなのか。

自分に、疑惑が向けられないように」

突き刺さるように冷たい声だった。

しかしそれ以上に、トーンは憤りを感じていた。

何をいつているのかさっぱりわからない。

ビオラの姓は確かに今初めて知ったことだし、リードとビオラが兄妹など知る由もない。

だからといって、何故そこまで冷たくする必要があるのか。

「随分な物言いだね。まるで僕がリードの味方だともいうかのようない口振りじゃないか」

ウィンドがトーンを睨み付けた。

「では聞くが、昨日の夜は誰と話していたんだ」

トーンは言葉を失った。

視線をまともに見返すことができなかった。

まさか、あの時のように風の音を聞いてわかったというのだろうか。

しかし、正直に話すわけにもいかなかった。

ビオラとリードが血のつながった兄妹であることを知って、復活という二文字が現実味を帯びてきたようにも感じていた。

彼女の生還を願っているのは、自分だけではないのだから。

「別に君を疑っているわけじゃない。

真実を知りたいだけだ。

昨日、リードと何を話したんだ。何を吹き込まれた？

君には間違った道を歩んでほしくないんだ。

だから正直に――」

ウィンドの言葉は、二階から聞こえてくるミンスの声によって中断された。

何かを見つけたらしい。

ウィンドはしばらくどうしようかと迷っていたが、再び二人を呼ぶ声が聞こえて仕方なく返事を返し、部屋を出て行った。

トーンはほっと胸をなで下ろしながら、ウィンドの後についていった。

ミンスのいる部屋は書物や紙が足場もなくなるほど散らばっていた。

その奥の、ほぼ空になった棚の前にミンスは立っていた。

部屋の惨状に呆気にとられている二人に向かって、ミンスは急かすようにいった。

「どうした、早くこっちに来てくれ」

部屋を散らかしたことは全く気にしていないようだ。

書物や紙を横に避けつつ道を作ってなんとかたどり着くと、ミンスは持っていた一冊のノートを開いて二人に見せた。

何かから切り抜かれた大量の記事が一枚一枚にびっしりと貼られ、必ず記事の隣にはそれを貼ったであろう日時が書き記されていた。最も古くて五年前の一月、四年前の三月で記事は終わっている。

『伝説の楽器不法所持。吟遊詩人の女性を逮捕』

『裁判中に女性が原因不明で倒れ、意識不明の重体』

貼られている記事は全て特定の女性についてのものばかりだった。トーンは記事に書かれたある文字を見て、ウィンドの方に振り返った。

「二人の子を持つって……」

ノートをめくりながら、ウィンドは答えた。

「ああ、リードの母親のことだ」

「知っているのか？」ミンスが驚きの表情を向ける。

「リードとは以前吟遊楽団で一緒だった。母親の顔と名前くらい知っている」

「ふむ……」

ミンスは額に手をあてて、何かを考えているようだった。

トーンはウィンドからノートを受け取ると、もう一度一枚一枚の記事に目を通していった。

小さな記事もあれば、一ページを丸ごと使うほど大きな記事もあった。

「伝説の楽器」という言葉が扱われているものは比較の記事が大きいようだ。

『オルガ・メロディオン。病院で心臓発作を起こして死亡。原因は不明』

最後のページにぼつんと貼られたこの小さな記事は、何だか切なかった。

まだ一枚ページがあったことに気付いてめくってみると、そこには殴るような字でこう書かれていた。

『機械の歪んだ音が、僕の家族を引き裂いた』

考え事をしていたミンスが、ようやく口を開いた。

「母親がリラを持っていたことと、リードがリラを手に入れようとしていることと、

何か意味があるということか。

リードは奪おうとしているのではなく、母から奪った楽器を取り戻そうとしているのか？」

誰も答えることのできない問いかけだった。

だが一つだけ、母と妹の死がリードの行動を駆り立てているのは確かなように感じられた。

リードはリラを手に入れて何をしようとしているのか、トーンにだけはわかっていた。

突然ミンスの腰元から音が鳴り出した。

ミンスは慌ててかかった服をめくり、腰にかけられていた赤く点滅する装置に手を当てた。

赤い点滅が消え、青く点灯する。

「こちら、ミンス」

いいかけて、ミンスは顔を強ばらせた。

何かが聞こえているのか、虚空の一点を見つめたまま微動だにしない。

額から汗が流れ、頬を伝ってぽとりと床に落ちた。

自分の心臓の鼓動が聞こえるかと思うほど、重たい沈黙が部屋の中全体を覆っていた。

しばらくして装置から手を離れたかと思うと、リードに関する資料を手早くまとめ始めた。

ウィンドが慌てて口を開いた。

「何があつた」

「今度はコルペットだ」

それで全てを伝えたというような口調でミンスが答えた。
手は動かしたままだ。

「町の四割程度が破壊されているらしいが、これまでより破壊の進行が遅いらしい。」

今からすぐに向かえばまだ可能性はある」

「鍵は？」トーンが聞いた。

「それを奪われない可能性だ。」

まだ守備兵が嚴重に管理しているそうだ。

コルペットはもとも多くのオートマシンを配備していなかったから、

それが功を奏したんだろう」

まとめた資料を脇に抱えてミンスは立ち上がり、

窓からのぞく崩れたコントラスの外壁を眺めながら言葉を継いだ。

「今回の戦いは、勝てるかも知れない」

勝てるかも知れない その言葉に一瞬でも不安を覚えたことに、
トーンは気付いた。

何が正しいのか、どうすればいいのか。

答えはまだ、心の中でくずぶつたままだった。

メトラの入り口まで来たところで、一行の元に一人の女性が訪ねてきた。

短く刈り取られた金色の髪と鍛え込まれた体から、トーンはすぐにどこかの守備兵であることに気付いた。

ところどころに巻かれた包帯を見るに、恐らくメトラの病院で治療を受けていたのだろう。

となると、コントラスの被害者だろうか。

ミンスが用向きをたずねると、女性は守備兵のそれらしく姿勢を正して答えた。

「コントラス第十八守備隊員、ビーナ・ベルローズにございます。先日のごでの件、私も拝見させていただきました。聞くところによれば、また騒動が起きているとか。もしよろしければ、私もご同行させていただけないでしょうか」

ミンスは間髪入れずに突き放すような口調でいった。

「けが人は足手まといになるだけだ。せつかく助かった命だ。それを無駄にするな」

背を向けて装甲車に乗り込もうとしたとき、ビーナと名乗る女性は沈んだ声でいった。

「全てを失ったあげくの命に、何の意味があるというのですか」

力強く握られたビーナの手は、微かに震えているように見えた。

「この前の事件で、父も母も、夫や子供も友達も何もかも失って、今日まで生かされてきました。そんな私には、事件を起こした犯人を捕まえて仇を取る以外にもう生きる意味はないんです」

トーンはウィンドの顔を見た。

悲劇の女性を眺める表情は、どこか同情を感じさせるものがあつたが、

それはトーンの期待していた表情ではなかった。

コントラス、シターンと二つの町を見て歩き、惨状を目の当たりにしてきたが、

一度も同情や悲哀を覚えたことはなかった。

機械派が音楽派に対してやってきたことと何も変わらない。

死んで離ればなれになるより、生きて離ればなれにされる方がよっぽど辛いことをトーンは知っていた。

メトラを離れてからこれまで、母を考えないことはなかった。

だからこそ、ウィンドの表情は理解できなかった。

機械派の力が強まってから吟遊詩人がどんな扱いを受けてきたのかも、

事件の原因が何であるかも知っているはずのに……

ビーナの元に歩み寄り、顔を胸に抱きしめてミンスはいった。

「少しでも被害者を出さないようにすることが、私たち守備兵の仕

事だ。

殺すことが仕事でもなければ、死ににいくことが仕事でもない」

リードだって被害者には変わらない。

母と姉を失い、それでも必要とする全ての人に音楽を捧げようとした彼を、

機械派は裏切ったのだ。音楽を壊すという形で。彼は誰が救ってくれるのだ？

ビオラが機械のせいで苦しんでいるときに、お前たちは何をしてくれた？

「これから早急にコルペットへと向かう。

命を粗末にするような行動はせず、怒りに身を任せないと誓ってくれば、

連れて行ってやろう。

一緒にリードを止めるんだ」

リードが止めようとしているのは、全ての生命に迫っている危険だ。

リードを止めることは、一時的な幸せと平和を手に入れることではない。

危険が無くなれば再び機械は動き出し、さらなる調律の乱れを引き起こすだけだ。

「間違っているのは、僕たちなんじゃないだろうか」

思っていたことがそのまま口をついてでた。

全員の視線がトーンに向けられる。

ウィンドの表情からは何も読み取れなかったが、

少なくとも、悲哀というような感情は浮かんでいなかった。

「だって、そうだろう。」

機械から発せられる音は空気の調律を乱し、
やがて人体に影響を及ぼし、生命は死に至る。

リードがやらなくなつて、そのうち自然に人は死んでいったんだ。
こうやって事件が起きず、先に吟遊詩人が死んでしまつたりでも
したら、

それこそ望む手なしだ。

そう考えれば、むしろ感謝すべきなんじゃないか。

彼がリラを手に入れようとしているのも、

歪んだ調律を元に戻そうとしてくれるからかも知れないじゃないか。

昔のダイヤグラム大陸を復活させたみたいだ」

ミンスはトーンを睨みながら口を開いた。

「それだつたら、わざわざ町を破壊する必要なんてないじゃないか。
話しをすれば済むことだ」

「音楽派の話なんて馬の耳も貸そうとしなかったのは誰なんだよ。」

さつき被害者を出さないことが仕事だっていったけど、僕たちには
何かしてくれたか？

音楽派が抗議したとき、まるでうるさいはえのようにあしらつた
のは

機械派の方じゃないか」

「それは違います！」

ビーナが前に出て叫んだ。

「あの抗議があつた後、コントラスの全守備兵が集められて調査を行いました。」

けれど結果、何も見つからなかったんです」

「当然だ。お前たちは何もわかっていなかったんだからな」

ずっと黙っていたウィンドが突然口を開いた。

「異常音の存在に気付けたのはリードの著しい攻撃があつたからこそであつて、

普段は非常に僅かな量しか発生していない。

その僅かな量が積もりに積もつた結果、機械塔の悲劇を招いた。わかるか？

機械の音が空気を乱すことがわかつたのは、全てリードのおかげなんだ。

目の敵にしている存在が、真実を教えてくれたんだ」

ビーナは信じられないという表情でウィンドを見つめ、次にミンスを見た。

その目は、誰が敵で誰が味方なのかわからないといった、怯えたような目つきだった。

ウィンドはトーンに向かっていった。

しかしそれは、トーンが思っていたような言葉ではなかった。

「だがトーン、勘違いするな。別にリードの今の行いが正しいと言っているわけじゃない。

彼は間違いを正すべく行動している。

それは確かだ。

しかしあの時私がいったように、無用な殺戮を起こすことは正しいことではない」

「殺戮を起こしているのは機械派が作りだした機械だ」

「じゃあ聞くが、機械を混乱させて殺戮兵器としたのは何だ。

リードでも機械派の人間でもない。

音楽そのものだ。

リードは愛する音楽を使って人殺しを誘発した。

そこには何の罪もない、ただ力に負けた哀れな人間もいたかも知れないが、

誰彼構わず殺したんだ。

音楽で。

ビオラがこよなく愛した音楽で！」

「やめろ！」

トーンは耳をふさいだ。その手をウィンドが力づくで引きはがす。

「逃げるな、自分の選んだ道を行くというなら、正直に真っ直ぐ真実を見つめろ！」

いいか、君がリードに味方するというなら、これだけは忘れるな。君が愛した女性が何を愛していたか。

君が奏でるそれにどんな思いを感じ、どんな思いを託していたか。知らないかも知れないが、彼女は――

目の前にいるはずもない人物を捉えて、ウィンドは口をつぐんだ。ミンスは何かに気付いて目を見張り、ビーナが慌てて銃を構える。トーンが振り向くと、そこにはリードの姿があった。

「約束通り、迎えに来たよ」

まるでトーン以外は見えていないかのように、リードはにっこりと笑みを浮かべた。

ウィンドがつかんでいた手を離し、自由になったトーンはゆっくりとリードの元へ近づいた。

右手に何かを握っているのが見えたが、そんなことは全く気にならなかった。

トーンに当たってしまうのを恐れ、ビーナは引き金を引けないでいる。

「いいんだね？」

トーンは静かに頷いた。

リードが草笛を引くと、穏やかだった周囲に徐々に風が吹き始めた。

ウィンドの表情には先ほどビーナを見ていた時と同じ感情が浮かんでいるように見えたが、

それが何を意味するのかは、トーンにはわからなかった。

風が紙くずや落ち葉を巻き添えにして大きく舞い上がる。

次の瞬間にはもう三人の姿は景色から消え、代わりに緑の生い茂る大地が広がっていた。

第六章：音楽の力

第六章 音楽の力

トーンが立っていたのは、

これまで見たこともないような自然の命溢れる世界だった。

あちこちに生え伸びた太い木々のざわめきは楽しく歌っているかの
ように聞こえ、

やむことのない動物たちの鳴き声は、新しい仲間を歓迎するパレードのように感じられた。

一歩踏み込んだときに小枝を踏んだ音で我に返り、トーンは辺りを見回した。

「僕ならこっちだ」

声のした方に振り返ると、
そこに変わらない笑顔を浮かべたリードの姿があった。

「気に入ってもらえたかな。森にいるみんなも、君を歓迎してる」

「ここは？」

トーンはぐるりと見渡しながら言った。

「名もない森さ。メトラの南側にあつた山を越えた先に存在する、
唯一誰の手にも犯されていない、僕と君の二人だけが知っている
特別な森だ」

トーンは胸一杯に空気を吸い込んだ。

これまで行っただこよりもおいしく感じられる。
立っているだけで全身が空気に包まれているのが分かった。

ここでオカリナを吹いたら、一体どんな音がするんだろう。

「ここで奏でる音楽は、すごい澄み切った音がするんだ」

トーンの心を読んだかのようにリードは言った。

「もしよかったら聞かせてくれないかな。

君の音楽を。

森の動物たちも待ち望んでいるはずだ。

それに、澄んだ空気の中で奏でる音楽がどれだけ美しい旋律を生むか、

一度味わっておくのも悪くないと思うし」

断る理由はなかった。

トーンはポケットからオカリナを取り出すと、

二、三度深呼吸をして緊張に強ばる体をほぐし、

ゆっくりと丁寧に、一音一音確かめるように音を紡いでいった。

全身に震えが走った。本当に自分の音かと疑ってしまうほど、

オカリナから美しい旋律が鳴り響いていた。

指が震えるのがわかる。

それは驚きでもあり、

感動でもあり、

恍惚でもあった。

ずっと憧れ、ずっと愛し続けたビオラの音楽のようだった。

二人を囲むようにたくさんの動物が集まってくる。

初めは何が起こるのかと不安になったが、すぐに彼らもただ音楽を聴きに集まってきたのだとわかった。

演奏を終えると同時に、リードが大きな拍手を送った。

「どうだった？」

全く違う世界が、目の前に広がったでしょ。

それが、本当の音楽の世界なんだ。

どんな生き物の心も魅入らせる力がある。

よどみがなく、全てが美しく輝き、多彩で心地よい音を放つ世界。僕たちはこれから、その美しい世界を取り返しに行く」

そうだった、とトーンは現実に戻された。

そのときはっと、リードの手に握られていたものを思い出した。

「コルペットで事件が起こっているって聞いたけど……」

「うん。鍵はもう手に入れたからね」

そう言っ、リードはおもむろに右手を挙げて持っていた鍵をぶら下げて見せた。

トーンの心配そうな表情に気付いて、優しい口調で言った。

「大丈夫だよ。」

ちよつと予想していたより手間取ったけど、僕はこうしてぴんぴんしてる。

君の力を借りたいのは次の町だ」

トーンが口を開こうとするのを手で制し、リードは続けた。

「その前に、まずは僕たちの部屋に案内してあげるよ」

自分の背丈と同じくらい長い茂みをかき分けながらリードの後に
ついていくと、

茂みがきれいな境界線を引くようにして突然途切れ、大きな広間に
でた。

空に突き刺さっているかのように見える長い木の枝が、
お互いの手を取り合うように伸びてその空間にドーム型の屋根を作
っていた。

無数の葉の隙間から太陽の光が差し込み、緑の温もりが心地よい空
間を作り出している。

その中心には丁度良い高さの二つの切り株と、
折れた幹や枝を集めて作られたであろう粗末な小屋があつた。

小屋の中は、当然といえば当然なのかも知れないが何も置かれて
いなかった。

唯一の飾りといえば壁に刺さった釘と、そこにぶら下げられた四つ
の鍵だけだった。

「それが、この前に話した鍵さ。

右から、コントラス、シターン、バンジョー、コルペットの鍵。
手に入れた順番で並べてあるんだ。

その後ろに、ミルリトンの鍵が加わる予定だよ」

「ミルリトン？」

トーンは思わず聞き返してしまった。

ミルリトンといえば、ダイヤグラム大陸で最も大きな町だと言われ

ている。

規模が大きい分、警備も半端な数ではすまないだろう。

それに鍵を狙っていることが知れてしまっている以上、
鍵を保管している場所は特に相当の護衛がつけられるに違いなかった。

「なんていうか、方法……というか、作戦みたいなものはあるんだよね」

トーンは不安になる気持ちを抑えることができなかった。

「もちろん」

リードはにつこりと笑顔を浮かべて答えた。

「ミルリトンの中心部に、太陽の塔というそれは高い塔があるんだ。そこで、君に音楽を奏でてもらいたい。

さっきのように、君のオカリナで」

返す言葉が見当たらず、トーンはその場で目をぱちくりさせた。
言葉の意味を理解するまで時間がかかり、
それを頭の中で整理するのにさらに時間がかかった。

「……音楽を弾くだけ？」

リードはこくりと頷いた。

「でも、わざと不快な音を出したり、変に気負って演奏してはダメだ。

さっき聞かせてくれたように、普段と同じように楽しんで演奏し

てくれればいい。

美しく透き通った音楽は、どこまでも遠くへ広がっていくものだから」

完全に納得はできなかったが、トーンはリードの言葉を信じることにした。

なにより、そのためにリードの元へ来たのだから。

「決行は明日だ。

それまではゆっくり休んでもらって構わないよ。
今、食べ物を持ってくるから」

そう言つて、リードは足早に小屋を出て行つた。

一人になった空間を、トーンは何度も見渡してみた。

糸のようなもので縛られた細めの幹や枝の束が無造作に積まれてできた壁に、

乾燥した様々な茎が組み合わさつてできた屋根。

扉はなく、外からの風が否応なく小屋の中に入ってくる。

それでも、何不自由なく過ごしていくことができるだろうと、トーンは思っていた。

不思議だった。

決められた手順に沿って決められた方法で建てられた家に当たり前のように住み、

暑いときは外にでて川や湖などの涼しいところで遊び、

寒いときは家の中にこもつてたき火を囲んで過ごしたものだ。

しかしここでは、ほぼ外界と同じ空間の中にいるにも関わらず、暑くもなく、寒くもなかった。

あちこちに生え育った緑が暑さや寒さを和らいでくれ、

生き物が過ごしやすい環境を作り出してくれている。
空気は澄み切っていておいしく、心なしか体も軽く感じられた。

ずっと昔の人は、こういう環境の中で長い間多少の苦はあったものの、

何不自由なく暮らしていたのだろう。

それなのに何故、人々は環境を悪化させてまで今のよう暮らしを選んだのだろうか。

ここの方がずっとずっと、暮らしやすいだろうに……

物音が聞こえ、トーンはびくつと小屋の入り口を見た。

りんごが一つ、ころころと転がってくる……と、

その後が続くように両腕に色とりどりの果実や野菜を抱えたリードが入ってきた。

二人で食べるには多すぎると思ったが、小屋の外を見て納得がいった。

そうだ。この森にいるのは、二人だけではないんだ。

次の日の昼頃、トーンは一人ミルリトンの町の中を歩いていた。
太陽の塔を見たことがなかったため無事たどり着けるか不安だったが、

何も心配はいらなかった。

到着してすぐに、一本だけ突き出た長く太い塔が、
見つけてくれといわんばかりにそびえ立っていたのだから。

塔のちょうど中心あたりに、

太陽のモニメントのようなものが取り付けられていた。

子供が絵に描くような、

オレンジ色の丸に沿うようにして三角の花が何枚も並べられたその

姿は、

一概にも太陽と呼べるものではなかったが、
太陽の塔だと認識させるには十分なものだった。

塔の入り口には、訪れる多くの人ばかりでごった返していた。
人の間を縫って中へ入ると、ガラスケースが壁に沿うようにして置
かれ、

太陽や月にまつわる書物や過去の遺産らしいものが飾られていた。
上にはどうやっていけばいいのだろうかと辺りを見回してみると、
すぐ近くにらせんの階段を見つけた。

トーンは目を見張った。

まさか、階段が勝手に動いているなんて！

「おい、いきなり止まるな！」

後ろで人がつかえていることに気付いて慌てて動く階段に乗り込
んだが、

トーンは不安でいっぱいのまま下へと流れていく風景を眺めていた。

春の太陽、夏の太陽……季節毎の太陽の景色が、
階段の動きに沿うようにして壁に描かれていた。

春は青々とした木々や満開の桜を遠くから見守る親のように、

夏は海水浴で賑わう海や森の中でキャンプをする人々と楽しく笑う
友達のように、

また秋も冬も、太陽は季節毎に違った表情で描かれていた。
それでも太陽は違う形にはならず、ずっと同じ姿のままだった。

動く階段を降りた後、トーンは邪魔にならないよう隅に移動して
から、

再び辺りを見回してみた。

右側には地上へ続く絵画や美術品などが並ぶ道がのびている。

正面には先ほど乗ってきた一方通行の動く階段があり、

左側にはトイレと、「関係者以外立ち入り禁止」と書かれた扉があった。

その扉こそ、頂上へと続く道であるはずだった。

トーンは正面の壁に掛けられた時計を見た。

日が暮れるまでにはまだ多少時間がある。

閉館の時間頃にトイレに駆け込み、三つ目の個室トイレにある天井の換気扇に入る。

手順は頭の中に入っている。

それで、立ち入り禁止の扉の先に忍び込めるはずだった。

突然何かに指を握られて、トーンは心臓が爆発するかと思うほどびっくりした。

見ると、指を握っていたのはまだ幼い子供の小さな手だった。

母親らしき女性がすみませんと頭を下げて、

子供を連れて父親らしき男性の元へと戻っていく。

三人とも幸せそうに展示物を眺めていた。

一体どういうものが飾られているのだろうか……。

メトラでは、昔はよく演奏会が開かれていたが、

何かを飾ったり並べたりして楽しむといったようなことはしたことがなかった。

もう一度時計を見る。ちよっとくらいなら、

見て歩いても構わないだろう。

初めに飾られていたのは、

無限に広がるかのような草原の空に大きく描かれた太陽の絵だった。

その隣には、絵の説明であろう文章が書きつづられている。

『太陽は決してその美しき姿を変えることなく、
その下に生きるものたち全てに光という生命を送り続けている。
草木は枯れることなくすくすくと成長し、
やがて実りの時を迎えて太陽の下を去っていくが、
再び種となって舞い戻ってくるものもいる。
しかし太陽は嫌な顔一つせずそれを受け入れ、
光を与えてくれる。
これほど大きな存在を前にして、
人間とはどれだけ小さな存在であるかを、
ひどく時間させる作品であろう』

太陽は、機械に同じように生命を与えているのだろうか。
とトーンは思った。

大陸の姿を変え、人の心を変え、空気の調律までも変えて全てを壊
そうとする、

全く正反対な存在である機械でも、太陽は嫌がらずに受け入れるの
だろうか。

それによって例え、多くの人が苦しむことになるうとも……。

トンは他のものも見て回った。

ねじを回すと奇妙に動き出す太陽の模型や、
太陽の形を模して作られたランプのようなものが置かれている中、
ある一つの写真にトーンは目を見張った。

それは、怒り狂うように燃えさかる炎をまとった太陽の絵だった。
全てのものを飲み込み、溶かしてしまいそうなそれは、
さつきまでのような慈しみに溢れた姿とは到底かけ離れたものだった。

た。

トーンにはそれが、機械に対する、いや機械を使用するすべての者に対する太陽の答えのように思えた。

そのとき突然塔内に音楽が流れ始め、どこからか声が聞こえてきた。

時計の針がもうすぐ塔が閉館になることを告げており、周りの様子をうかがいながらトイレへと向かっていった。

トイレに入ってから、何か緊迫めいたものがあるのだばかり思っていたがなんてことはなく、

簡単にことは進んでいった。

ランプに灯をともし、どこへつながつてともわからない階段を上っていく。

やがて大きな扉に突き当たり、トーンはゆっくりとドアノブを回した。

がちゃりという音がして、扉の隙間から夜の月明かりが差し込んできた。

扉を抜けると、そこにはミルリトンの広大な景色が広がっていた。建物の明かりや忙しなく移動する車のライトが町を色づけ、ところどころで様々な色の明かりが不規則に点灯している。

機械警察支部はどこにあるのだろうかと探してみたが、暗くて建物の区別が全くかず、すぐに断念した。

ミンスやウィンドも、この町に来ているのだろうか。

頭上に巨大な鐘が吊されているのが見える。

トーンはオカリナを取り出し、じっと眺めながらリードの言葉を思い出した。

「頂上にある鐘は、夜の十二時を回ると鳴る仕組みになってる。鐘が鳴ると同時に、オカリナを吹いてくれればいい。鳴り終わるまで、ずっとだ」

同時に、この町も戦火に包まれることになるのだろうか？

そう思った矢先、トーンの耳元で鐘の音が大きく鳴り響いた。しかし思ったよりも衝撃がなく、すぐに音が鐘からではなく、どこかから流されているものと気付いた。

時間だ。

トーンは大きく深呼吸して強ばった体をほぐし、ゆっくりとオカリナを吹き始めた。

やはり森で吹いたときほど透き通った音はでなかったが、目を閉じてただひたすら吹き続けた。

聞こえていた町の喧噪はどこかへ消え、自分の奏でる音楽と鐘の音だけが聞こえていた。

鐘の音が止んだことに気付き、トーンはオカリナを吹くのを止めた。

最悪の景色を想像してゆっくりと目を開く……しかしその目に飛び込んできたのは、

コントラスのような惨状ではなく、何も変わらない、ついさつき見たものと全く同じ景色だった。待っていても、何も起こりそうにない。

失敗したのだろうか。

ふと、町に灯された明かりが全くに変化していないことに気付いた。

もしかしたら 体が震えるのがわかった。

音楽だけでも人を苦しめ、死に追いやることができるようじゃないか。

顔からさあっと血の気が引いていく。

いてもたってもいられなくなり、トーンは駆け足で来た道に戻っていった。

塔の外に広がる光景を見て、

トーンは目を大きく見開いた。

塔一帯に、恐らくミルリトンに住む全ての人ではないかと思うほどの

もの凄い数の人が集まっていた。

何か知られてしまったかと思わず構えたが、

人々は何が起こっているのか、

どうしてこんなところにいるのかさえも分からない様子で、

きよろきよろといぶかしげに辺りを見回しながら方々へ散っていった。

トーンも彼らと同じだった。

何が起こったのかわからないままだった。

果たして鍵を手に入れることができたのだろうか。

その答えを知っているのはたった一人しかない。

トーンは足早に、リードが待っているはずのあの小屋まで戻っていた。

「おかえり」

リードは片方の切り株に座り、
周りに散りばめられた果実の一つを頬張っていた。
手招きして向かいにある切り株に座るよう促しているのが見える。

「空からの眺めがどうだったか、聞かせてほしいな」

まるで旅から戻ってきた友達を迎えるような口調に
自分が遊ばれていたのではないかと思い、

トーンは憤りを覚えずにはいらなかった。
もしかしたら、鍵を手に入れられなかったことを隠そうとしている
のかもしれない……。

トーンはだんだんいらしてくる気持ちを何とか抑え、
切り株に座ってリードを真剣な眼差しで見つめ返した。

「鍵は、手に入ってたんだよね」

少し皮肉っぽい言い方になりしまったとも思ったが、
別に弁解するつもりもなかった。
実際にそう思っていたのだから。

リードはきょとんとした顔で何度かまばたきをした後、
再び笑顔に戻って口を開いた。

「もちろんだよ」

「やっぱり……って、何だった?」

思いがけない返事に、トーンは思わず聞き返してしまった。

「ちゃんと手に入れたよ。ほら、ここに……」

そういつて、リードはポケットからごそごそと何かを取り出し、トーンの手のひらに乗せてみせた。

小屋の中で見た鍵と全く同じ鍵がそこにあった。

「え、でもどうして……」

トーンはまたもや頭が混乱してきた。

「町は全然壊されてなかったし、

ずっと塔の天辺にいたけど、

騒動らしい騒動なんて一度も」

「見るはずなんてないさ。今回は、町を遅う必要なんてなかったんだから」

「どういうこと？」

トーンは回りくどい言い方に少しいらしながら聞いた。

「塔の外に出たとき、たくさんの人だからできていただろ？」

トーンは頷いた。

「ここに来て初めて君に演奏してもらったとき、僕がなんていったか覚えてる？」

「確か……美しい世界を奪い返しに行く……とか」

トーンは天をあおぎながら必死に記憶をたどっていった。

「違う世界がどうか……心を魅入られるとか」

「そう、それだ」

「ご名答と言わんばかりに、リードが声を上げていった。

「本当の音楽は、全ての生き物の心を魅入らせる力がある。それは人間も同じさ」

「つまり塔の周りに人が集まっていたのは、僕の奏でた音楽に魅入られてきたと？」

リードが満面の笑みを浮かべる。

しかしそんなはずはないと、トーンは思ったことを口にした。

「でも本当の音楽は、澄み切った空気の中でしか奏でられないんじゃないか……」

「それが、君の力なんじゃないか」

初めて聞いた真面目な口調に、トーンは一瞬圧倒されてしまった。リードの表情からいつのまにか笑みが消え、真剣な眼差しで言葉を継いだ。

「気付いていないと思うけど、シターンでも同じような光景を見たはずだ。

僕だって驚いたよ。

全然音はにこっていて、きれいじゃなかったのにさ。

それでも、君の奏でるオカリナの音楽に心を魅了する力があるのは

まぎれもない事実だった。

塔の周りに集まったたくさんの人ばかりが、いい証拠じゃないか」

トーンは何だか恥ずかしくなって、向けられる視線を避けるようにうつむいた。

自分にそんな力があるなんてこれまで一度も考えたことがなかった。いや、きっと自分だけの力じゃない。

ビオラのオカリナがあったから、ビオラが側にいてくれたからこそ、奏でることができたんだ。

でもまてよ……とトーンは思った。

それが鍵と何の関係があるんだ？

先に口を開いたのは、リードの方だった。

「鍵は、ミルリトンの守備兵の一人が持っていたんだ。

在処を特定しづらくしたかったんだろうけど、僕には好都合だった。

リラを保管する鍵は特別だね。

音楽に反応して人には聞こえないくらいの小さな音を出すようになってるんだ」

リードはそこで一息ついて手に入れた鍵をじっと見つめ、ゆっくりと口を開いた。

「君がいなかったら、きっと僕は今この鍵を手にはいなかったと思う。」

あれだけ大きな町に音楽を響き渡らせることはできなかっただろうし、

そもそも人を呼び寄せる力なんてない。

力づくでやろうとしていれば、守備兵に捕まって今頃処刑されていたかも知れない。

ありがとう。本当に感謝してるよ」

「別に、リードの言うとおりにオカリナを吹いただけさ。鍵、並べてくるよ」

その場にいるのも恥ずかしくなってきたトーンは、リードから鍵を受け取ると逃げるように小屋へと駆けていった。

四つの鍵がかかっている後ろに釘を差し込み、二人で手に入れた五つ目の鍵をかけた。

あと一つで、ピアノを生き返らせることができる。

今では本当にそう思えるようになっていた。

トーンはやる気持ちを抑えながら足早に戻り、食べかけの果実を手に取りながらいった。

「次はどここの町に行くの？」

今度も同じように、オカリナを吹けばいいのかい？」

しかし、リードの答えは全く思いも寄らない方向へと進んでいった。

「最後の鍵は、実はもうここにあるんだ」

トーンは目をぱちくりさせたが、

すぐに鍵が保管されている町のことを思いだし、目を輝かせた。

「やっぱり、メトラに保管されていた鍵はリードが持っていたんだ！

だから
「

リードが首を横に振るのを見て、トーンは言葉を呑み込んだ。他になにかあっただろうかと思いを巡らしてみたが、思い当たることは何一つない。

「じゃあ六つ目の鍵って一体どこに……」

リードの返答に、トーンは言葉を失った。

「君の持っている、そのオカリナの中だ」

一瞬、何をいつているかわからなかった。

ビオラがくれたオカリナの中に、最後の鍵が入っているというのだ。オカリナを取り出して耳元で振ってみるが、何かが入っている様子など微塵も感じられない。

穴から中をのぞいてみるが暗くて何も見えず、太陽の光に当ててもう一度見てみるが、結果は変わらなかった。

リードが口を開いた。

「恐らく中で固定されているんだろう。

だから、君も気付かなかったんだと思う」

全く信じられないという表情で、トーンはリードを見た。そもそもなんでそんなことを知っているのかわからない。

オカリナをまんべんなく調べてみたが、

鍵を入れた形跡などどこにも見当たらなかった。

リードの言葉が本当だとすると、始めから入っていたということになる。

だがビオラは鍵のことなど、何もいつていなかったはずだ。

トーンは疑いの眼差しをリードに向けていった。

「この中に鍵が入ってるなんて、どうしてわかるんだよ」

「知っているからさ。」

そのオカリナを。

君がビオラからもらったものだってことも」

トーンは目を大きく見開いた。

なんでビオラのことを　そこではっと、リードの家で見た写真のことを思い出した。

なぜこんな大事なことを忘れていたのだろうか。

いや、信じようとしていなかったのだ。

リードがビオラの兄であるという事実を。

リードは思い出を懐かしむような表情で空を見上げた。

「そのオカリナは、母さんが作ったものなんだ。」

僕の持っている楽器もそう。

母さんは楽器を作るのが大好きだった。

その方が自分の好きな音を作り出せるからって。

たくさんの楽器を作っては、大きな楽器は僕が、

小さな楽器はビオラがもらって、二人で弾いて聞かせてあげた。

ビオラは中でも特にオカリナの音を好んで、

母さんに教えてもらいながら自分でもオカリナを作ったんだ」

トーンは壊れてしまったオカリナを思い出して、
胸が押しつぶされるような気分だった。

「母さんの日記を見つけるまでは、僕も鍵が入っているなんて知らなかった。でも気付いたときにはもう遅かった。

まるで時を見計らったかのように、ビオラの死を告げられたんだ」

最後の言葉に殺意のような感情が込められているのを感じ取り、さらにそれが自分へ向けられているように思えてトーンは無性に腹が立った。

「ビオラを殺したのは僕じゃない！」

リードはにつこりと笑っていった。

「わかってる。

君の音楽を聞いてはつきりしたよ。

一番信用している人に渡したっていうビオラの言葉がすぐに理解できた。

本当の音楽を奏でられる君なら、

機械に汚染されたダイヤグラム大陸を元の姿に戻すことができる。だから君に、オカリナを渡したんだ」

このオカリナを受け取ったときのことをトーンは思い出していた。

騒音から逃げるように下流へと移動し、

ようやく辿り着いたところで、ビオラは倒れた。

部屋へ連れ戻した後、ビオラは震える手でこのオカリナを自分に渡して、

死んでしまった。

「このオカリナで、たくさんの人を幸せにしてあげてね」

それが、ビオラの最後の言葉だった。

機械に苦しむ人々を救ってほしいと、

機械という存在に縛られた人々を救ってほしいと彼女は願い、その思いを自分に託したのかもしれない。

トーンはそこであることを思い出し、慌ててリードに振り返った。

「ちょっと待て。

そういえばリラって、伝説の吟遊詩人にしか弾けなかったはずじゃ……」

何かでそう読んだことがあった。

それが本当なら、全ては水の泡だ。

しかしリードの返事を聞いて、トーンはさらに目を大きく見開いた。

「それは他人ならの話だよ。

血が繋がっていれば、話しは違う」

なんと、リードは伝説の吟遊詩人の子孫だというのだ！

「僕にしかできない。

僕にならできるんだ。

リラを使って、この大陸を救うことができるのは」

夢でも見ているんじゃないかと思った。

信じられないようなことが次々と明らかになり、

伝説の吟遊詩人の生まれ変わりが目の前にいるなんてのだ。

リードの言葉が嘘だとは到底思えなかった。

今さら何を疑うというのか。

例え嘘だったとしても、どちらにしろもう前に進むしかないところまで来ているのだ。

トーンはオカリナに視線を落とした。

何も迷うことはない。

思い切り振りかぶり、地面に力強くオカリナを叩きつけた。

オカリナは粉々に砕け散り、中から一つの鍵が姿を現した。

それは間違いなく、二人が探していた六つ目の鍵だった。

トーンは全ての鍵を持ち、藁帽子を深くかぶってパンの町を訪れた。

通りに人の姿はなく、嵐でも来るのではないかと思うほど静まりかえっている。

リラは機械警察省本部の地下に保管されているらしく、

リードは本部の警備を引きつけると行って先に行ってしまった。

しかし本当に大丈夫なのだろうか、トーンは不安でならなかった。相手も恐らくこっちが全ての鍵を手に入れていることぐらい気付いているだろう。

これまでのリードの行動、ミリリトンでの一件を考えれば、それ相応の対処を用意してくるはずだ。簡単に通してくれるとは思えなかった。

トーンは大きく深呼吸した。

今は信じるしかない。

そう思って足を踏み出したとき、突然背後から声がした。

「ちょっと君、そこで止まりなさい」

誰かに見つかったり、捕まったりすれば全てが台無しになってしまふことくらい、

承知していたはずだった。

それなのにどうしてこんな道のと真ん中で物思いにふけってなどいたのか。

トーンは自分の愚かさを、少しでも気を緩ませた自分を恨んだ。

「ゆっくりとこっちを向いて」

声の調子からしてまだ気付かれてはいないようだった。

さて、どうしたものか。

全速力で逃げるか？

いや、下手に目立っては逆にまずい。

トーンは言われた通りにした。

帽子のつば越しに守備兵の足の先がみえる。

「こんなところで何をしている。」

外出禁止警告を聞いていなかったのか？」

だから誰もいなかったのか。

もしかしたら上手く言い逃れられるかも知れないと思い、トーンはとっさに思いついた嘘をまくし立てた。

「父が急病で倒れてしまって、

急いで薬を取りに行かなくてはいけないんです。

母は自分が生まれる前に他界してしまって、

父にまでいかれてしまったら、

自分は一人でやっていけるかどうか……」

トーンの言葉に守備兵は少しの間黙っていたが、やがて小さくため息をついていった。

「わかった。

急いでお父さんに薬を渡してやれ」

トーンは頭を深々と下げながら大きな声でお礼の言葉を述べ、逃げるようにその場を後にした。

人目のつかないところで足を止めると、全身にどつと汗が噴き出した。

心臓の鼓動が聞こえる。

口で大きく息を吸い体に十分な空気を取り込んでから、顔を両手ではたいて心を落ち着かせた。もうあんな思いはまっぴらだ。

無事に本部までやってきたトーンは、リードの底知れぬ力を実感せずにはいらなかった。

誰もいない裏門をくぐり、

地下への入り口へと続くがらんとした黒いカーテンの上を歩いていく。

どこかに身を隠して様子をうかがっているのではないかと周囲に目を走らせてはいたが、

結局最後まで誰にも出会うことはなかった。

地面に隠れるようにして設置されていた扉に気付き、トーンは取り付けられている輪っかを引いて扉を開けた。冷たい風が中から吹き上がる。

地下へと続く階段がはつきりと見え、

中は思っていたよりもずっと明るそうだった。

側にあつた留め具で扉を固定して、トーンはゆっくりと階段を下りていった。

地下洞窟というよりも、しつかり作り込まれた秘密基地みたいだとトーンは思った。

鉄やコンクリートで作られた壁に、一定の間隔で天井に取り付けられた照明。

食料貯蔵庫や仮眠室のようなものである。

しかし何より不気味なのは、温もりが全く感じられない空気の冷たさだった。

寒いとかというものではなく、死という感覚が空間を漂っているような感じだった。

奥に行けば行くほど、その感覚は強くなっていった。

リラを見つけるまでにそれほど時間はかからなかった。

一本道をひたすら進んでいくと、やがて大きな広間に出た。

中央には鉄格子の箱があり、

四方の壁から伸びた鎖がその箱を何重にも縛り付けて宙に固定していた。

一歩足を踏み入れたとき、

トーンは突然自分の体が内から朽ち果てていくような感覚に襲われた。

喉からこみ上げてくるものを何とか飲み込み、気持ちを落ち着かせる。

背中が汗でびっしょり濡れているのがわかる。

まるで死神が今にも自分の首をかつ切ろうとしているような恐ろしい感覚が全身を包み込んでいた。

これ以上足を踏み入れてはいけない。
全身の細胞がそう訴えているような気がした。

しかし次に足を踏み出した時には、もう何も感じられなかった。

トーンの興味はすぐに目の前の箱に向けられた。
一歩近づく度に心臓が大きく脈打つのがわかる。
箱はもう目と鼻の先だった。全身に震えが走る。

本でしか見ることの叶わなかったリラが、今日の前に置かれていた。

鎖をつなげるように取り付けられた錠前を手に入れた鍵を使つて外していきながら、

トーンはリードのことを考えていた。
今どこにいるのだろうか。

捕まつてはいないだろうか。

思えば、全てがリードのおかげだった。

真実を教えてくれ、進むべき道へと導いてくれた。

リードがいなければ、今頃自分はどうなっていただろうか。

乱れていく空気の中、何も知らないまま死んでいたかもしれない。
感謝してもしきれないくらい世話になった。

無事リラを取り返して、ピアノを生き返らせることができたとして、
自分は一体何をリードに返してあげることができるだろうか……。

思わず手をすべらせてしまい、

最後の錠前が甲高い音を立てて入り口の方に転がってしまった。
慌てて振り返り、入り口の先に人影を捉えて思わず息を呑んだが、
それがリードだとわかってほっと胸をなで下ろし、

自由になった箱に視線を戻した。

リード？

トーンが再び慌てて振り返ると、リードが笑顔でそれに答えた。しかしそれが作り笑いであることは見て明らかだった。

服があちこちで裂け、血がにじんでいる。顔色が悪く、今にも倒れてしまいそうだ。

近づこうと一歩踏み出したが、

不意にリードの背後に現れた一人の見慣れた姿が視界に入り、トーンはその場に凍り付いた。

「トーン、君の負けだ」

何故ウィンドがここにいるんだ？ それに一体何をいつて……。

「地上で何十という守備兵が待機している。

リラを手に入れたところでもうどうしようもない。諦めるんだ」

トーンは愕然とした。

逃げ道は断たれてしまった。

せつかくここまでできたというのに、リラがもう目の前にあるというのに、

何もできないまま終わってしまってしまうのだろうか。

だがリードは違った。

リードの目は傷ついてひどく弱っているように見えたが、そこには諦めの色など微塵も感じられなかった。

やってみなければわからない。

何となくそういわれているような気がして、トーンにも力が湧いてきた。

「リラを……」

リードの言葉に、トーンは急いで箱の中からリラを取り出した。

しかし渡しに向かおうと踏み出した足は、ウィンドの怒号によって再び押し止められてしまう。

「トーン、君は今何をしようとしているのか、本当にわかっているのか？」

リラを両手に抱えたまま、トーンははっきりとウィンドを見つめ返した。

「機械のなかった大陸を取り戻そうとしているんだ」

ウィンドは間髪入れずに答えた。

「君が取り戻そうとしているのは、ピアノだけじゃないのか？」

トーンはぎょっとして、思わず視線を逸らしてしまった。

ウィンドはたたみかけるようにいった。

「機械をなくすというなら、どうやってその機械をなくすつもりだ。まさか霧のように消えていくわけではあるまい。」

君は少しでも、その方法を考えたことがあったか？
リラを使ってどうやって機械を消していくのかを」

いわれてみれば、一度も考えたことがなかったような気がする。
いや、方法などどうてもよかったのだ。

『なくなる』ということでも満足していた。
ピアノのことだって同じだ。

『生き返る』ということだけで満足して、どうやって生き返らせる
のかは聞いていない。

その答えを求めるように、トーンはリードに振り返った。

しかしリードはいつものように、笑顔を浮かべただけだった。

ウィンドはあざけるようにいった。

「リードは答えてくれたか？

答えてはくれまい。

リラが破壊の楽器などと、いえるはずがないからな」

破壊の……なんだって？

トーンはリードを見て、ウィンドを見て、再びリードを見た。

リードが苦しそうに口を開いた。

「君を止めるための、単なるでまかせさ」

リラを持つ手に力が入る。

リードのいうとおりだ。

この楽器は呪われたこの大陸を復活させた大陸ではなかったか。

トーンがウィンドを睨み付ける。

「あなたは、吟遊詩人の誇りをなくしてしまったんですか？」

「君は何もわかっていない」

ウィンドは表情こそ落ち着いていたが、その声はどこか焦っているような、

何かを恐れているようにさえ感じられた。

「なぜオカリナを壊したんだ。一体なぜ！」

彼女は音楽を愛していたんじゃないのか？

それなのにどうして、それを壊すようなことをしたんだ！」

ウィンドの思いがけない言葉に、トーンは呆然と立ちつくすしかなかった。

言葉の意味が理解できなかった。

オカリナを壊したことに後悔などしていない。

心は痛んだが、リラを手に入れるためにはどうしてもそうしなければならなかったし、

ビオラだって……。

トーンはなぜか突然、いいしれない胸騒ぎを感じた。

ビオラは何といていた？

『このオカリナで、みんなを幸せにしてほしい』

トーンはずっと、オカリナに入っている鍵のことをいつているのだと思っていた。

だが『このオカリナ』が意味するものが果たして、鍵ではなくオカリナそのものだったとしたら？
ウィンドはそういいたいのではないか？

トーンは首を横に振った。

しかしそれではつじつまが合わない。
何も救えないじゃないか。

ビオラも、母も、この生まれ育った大陸も全て、機械に汚染されたままだ。

まどわされるな！

トーンは心の中で自分自身に怒鳴った。

ビオラが機械によって殺されたことを忘れてしまったとでもいうのか。

もう悩まない。

悩むことが、全てに対する侮辱だと思った。

不可解な点はたくさんあった。

だが一つ確かなのは、機械のある世界に希望はない。
ということだった。

不安げに見つめるリードに微笑み、次にウィンドを見た。

その目には、怒りの炎ではなく、決意に満ちた炎が宿っていた。

「僕は希望のある世界を選ぶ」

リードまでの距離は、ウィンドからよりも近いはずだった。

トーンが走り出すと同時に、ウィンドも走り出す。

腕を伸ばしてリードにリラを渡し、その勢いのままウィンドに体当たりして、

鉄の床を転がっていった。立ち上がろうとする背後で、

リードの声が聞こえてきた。

「もう戻れないよ、ウィンド」

トーンには、その言葉が自分にも向けられていたような気がしていた。

ウィンドが叫ぶ。

リードがそれを無視して、ゆっくりと震える指でリラを奏で始めた。今にも倒れそうだった体はみるみるうちに生き生さを取り戻していく。

柔らかく真っ直ぐな音楽が響き渡る　と、

突然大きな震動と地鳴りがしたかと思うと、

あちこちの鉄の床が盛り上がり始めた。

「トーン、急いでこっちにくるんだ！　そこにいては危険だ！」

ウィンドの声が聞こえたが、トーンはそれどころではなかった。

震動は徐々にその大きさを増していき、

今ではまともに立っていられないほどになっている。

バランスを保つだけで精一杯だった。

足下の床が盛り上がった反動で足を滑らせ、

思い切り尻餅をついてしまう。

次の瞬間、目の前の床を突き破って一本の太い幹が顔をのぞかせたかと思うと、

もの凄い勢いで生え伸びて天井を突き破っていった。

盛り上がったいた床のあちこちで同じように大小の幹が床と天井をつなぐ柱のように伸びていく。

それだけじゃない。

幹のあちこちからさらに幾重もの蔓が生えだし、壁を這うように一気に伸び始めた。

トーンは慌ててウィンドの元に駆け寄り、ウィンドは風の音に全神経を集中させて、

次から次へと襲ってくる幹や蔓を避けていった。

リードの背後の床がひときわ大きく盛り上がったのを見てトーンは叫んだが、

リラを演奏する指以外ぴくりとも動こうとしない。

力ずくで助け出そうと踏み出したが遅く、

何千年と生きたかのようながっしりとした幹が瓦礫を舞い上げながら姿を現し、

爆発したかのような轟音を響かせて天井を突き破っていった。

瓦礫や土や埃などいろんなものが降り注ぐのを、トーンは通路から眺めていた。

いつのまにか音楽は聞こえなくなっていた。

押しつぶされてしまったのだろうか……しかし確かめようにも、広間に蔓延した砂埃のせいで全く何も見えなかった。

徐々に砂埃が薄れていく。

人の形をした影を捉え、トーンは胸が高なるのを感じた。

「リード」

降り注いだ瓦礫や土がまるでリードを避けるように地面に散らば

っている気付き、

トーンは息を呑んだ。

リードには傷一つない。

そう、本当に傷一つついていないのだ。

先ほどまであったはずの無数の切り傷は嘘のようにどこかへ消えてしまっていた。

リードがトーンに微笑みかける。

「いったらう、リラには元に戻す力があるってさ。」

君がリラを渡してくれなかったら危ないところだったけど。

それにほら……」

いいながら、リードは後ろを振り返った。

「君の願いも、叶えることができた」

トーンははつとして辺りを見回した。

しかし目に入るのは壁にからみつくように伸びた蔓やたくさんの幹だけで、

それらしきものはどこにも見当たらない。

ふと、リードの視線の先にある幹の形が、他のとは異なり何かを象っているように見えた。

天辺に刻まれた複数のしなやかな線は髪の毛のように見え、

二つの楕円は目のようにも見える。

まるで女性の上半身だけが幹から生まれてきたかのよう

「肉体はもう朽ち果ててしまったから、

せめてビオラの好きだった自然の一部に、

魂を呼び寄せたんだ。

話すことはできなくても、
君の声は聞こえているよ」

返す言葉もなかった。たんたんと平気で話すリードが信じられなかった。

思い描いていたものとは全く違う光景が目の前に広がっていた。
面と向かって言いたいことがたくさんあった。

大事な手作りのオカリナをくれたことに礼をいい、
それを壊してしまったことを謝りたかった。

これまでに過ぎていった色々なことを話し、
今日までの武勇伝を伝えたかった。

それなのに……トーンは、木になったビオラを見上げた。

当たり前だが、表情には何も浮かんでいなかった。

幹に近づき、まるで本物ようにしなやかに伸びたビオラの手におそ
るおそる触れてみた。

あたたかい。

血が通っているかのように脈打つのが感じられる。

しかし、それが余計に切なさや孤独を感じさせた。

トーンはがくりと膝を落とした。

これが……これが答えだというのか……。

歩み出そうとするリードの前に、すかさずウィンドが立ちはだか
る。

「行かせはしない」

リラから音が一つ漏れたかと思うと、

ウィンドは突然横からしなるように飛んできた蔓に吹き飛ばされた。リードは何にも目もくれず、蔓をのぼって地上へと姿を消した。

ウィンドは痛みにつめく体をこらえながらうなだれているトーンの元に歩み寄り、

髪をつかんで無理矢理顔を自分に向けさせた。

「自分で選択した道を悔やむんじゃない。

その行為がどれだけの人を侮辱することになるか、よく考えるんだ」

トーンは木になりはてたビオラを見上げた。

目から涙のように樹脂が流れていることに気付き、

ビオラがいつていたという言葉を思い出した。

『オカリナは、一番信用している人に渡した』

なぜオルガは、オカリナに鍵を隠したのか。

なぜビオラは、実の兄ではなく自分にオカリナを渡したのか。

彼女たちは大陸の復活など望んではいなかった。

ただ純粹に音楽を愛する心を持ち、音楽の美しさを理解し、

その音楽をみなに伝えてくれることを望んでいたのだ。

音楽で人を殺し、全てを破壊するなど、

全く望んではいなかったのだ……。

トーンは自分の愚かさを呪い、ただその場に泣き崩れるしかなかった。

第七章：響き渡る音楽

第七章 響き渡る音楽

一夜もしないうちに、パンの町はまるで数百年の時を経たかのような、

緑のうつそうと生い茂る大地へと姿を変えた。

大陸をまるごと飲み込んでしまいそうなほどに広がった植物は機械という機械に絡みつき、

建物や大地だけでなく人間をも貫いていき、あちこちのつるや木の枝の先に、
生々しい死体をぶらさげていた。

その様子を、トーンはビオラの木の傍でただ呆然と眺めていた。

心にぽっかりと空いた空間は、もう決して埋められることはない。

時折聞こえてくるリラの音は柔らかく包み込むように優しくだったが、目の前に広がる光景は全く逆で、

まるで善という仮面をかぶった悪魔のささやきのように感じられた。ウィンドが隣にいてくれなければ、きっとどこか遠くへ逃げ出していただろう。

音楽が届かない場所へ、ビオラの存在を忘れられるほど、どこかずっと遠くの場所へ……。

太陽の位置は地下に入る前とほとんど変わっていなかったが、ひどく長い時間が流れたように思えた。

ウィンドはずっと遠くを眺めたまま、何かをのぞくように目を細めている。

トーンは重たい口を開いた。

「こんなことになるかわかっていながら、
どうしてあるとき僕を止めようとしなかったんですか」

あの時 リードの味方になるといったあの日、
ウィンドが全てを教えてくれてさえいれば、
こんなことにはならずに済んだかもしれない。

しかしそんな問いなど、ウィンドにとってはただの言い訳に過ぎ
なかった。

「止めなかっただと？ 私はいったはずだ。
ビオラが何を考え、君に何を託したのかを忘れるとな」

「僕にとっては、機械がなくなることこそが彼女の望む世界だと思
っていました。

オカリナを預けてくれたのも、
リラを手に入れて大陸を昔の姿に戻して欲しいと願っていたんだ
と……」

そこで一度言葉を切り、トーンは眼前に広がる惨状を見た。

「でも違った。

気付いた時にはもう遅かった。
リラがこんな楽器だったとわかっていれば、
オカリナを壊してまで鍵を手に入れようとは思わなかった！」

語気が荒くなる。

自分のいっていることが単なる責任転嫁でしかないことは、
トーンも十分承知していた。

だがそうでもしないと後悔や憎悪の念に体が押しつぶされてしまいそうだったのだ。

「君はまだわかっていない」

トーンはぎょっとしてウィンドを見た。

「彼女は君にただ、純粋に音楽を愛し続けて欲しかったからオカリナを渡したんだ。

機械がどうか、リラがどうか、

そんな余計なことは考えず、ただ純粋に」

ただ純粋に……いつしか、音楽のことなど考えていなかった自分に気付いた。

ピオラを生き返らせることや大陸を元の姿に戻すことばかり考え、そもそもの発端である音楽に対して、何も考えていなかったのだ。いや、忘れてしまったのかもしれない。

自分の欲求さえ満たされれば、それでよかったのだと……。

再びウィンドが口を開いた。

しかしその声には、これまでのような冷たい口調ではなかった。

「リードに味方するといった時、私は何か考えがあるのではないかと思ったんだ。

だから止めなかった。

だから君のいうとおり、私に全く非がないとはいえない」

ウィンドはそういつて立ち上がると、遠くの一点を真っ直ぐ睨み付けた。

「だからといって、ここで泣きべそをかいているつもりもない。自分の過ちは自分で取り戻す」

ウィンドは遠くを眺めているのではなかった。リードの向かった先を見ているのだ。

力強い瞳を持ったウィンドがうらやましかった。自分が犯してしまった大罪を受け止めて先に進むことなど、トーンにはできなかった。

誰かに責められるのが恐かった。罰せられるのが恐かったのだ。

それにここでビオラに謝り続けていれば、いつか自分の罪が許されるような気がしていた。

そんなトーンの罪の意識を、ウィンドの次の言葉が優しく包み込んでいった。

「今回起こってしまったことは確かに君の責任だ。だがこうも考えられないか？

君がやらなくとも、きっと誰かがやっていたかもしれない。

リードが君からオカリナを盗み、一人で全てを進めていたからもしれない。

それにリードが事を起こさなければきっと私がやっていただろうと、最近思うんだ。

少なくとも、君がいてくれたから、今でもミルリトンは無事なんじゃないか」

これからやってくるであろう未来を考えれば、そんなことが何の意味も持たないことだと思っていた。

だがウィンドの言葉を聞いて気付いた。
ウィンドは信じているんだ。
自分たちの勝利を。

まだ遅くないだろうか。
リードを止めることができれば、ビオラは自分を許してくれるだろうか。

「最悪な事態を招いてしまったのは確かだ。
だがまだ結果は決まっていない。
罪を犯してしまったのなら、それを償わなければ」

トーンはウィンドから向けられた視線を正面から見つめ、大きく頷いた。
後悔している暇はない。
やることはまだ残っているのだ。

ウィンドが左耳に手を当てたのを見て、
トーンははっとして右耳に手を触れたが、
NRCはどこかへなくなっていた。
だが気分が悪くなる様子はない。
リラの音楽が、本当に空気の調律を直してくれたのかもしれない。

しばらくして、遠くに一台の装甲車がこちらに向かってくるのが見えた。
恐らくウィンドがミンスを呼んだのだろうが、トーンは気持ちが落ち着かなかった。
他の人も、ウィンドと同じように自分を迎えてくれるとは思えなかったのだ。

車から降りてきたのは、ミンスとビーナの二人だけだった。ビーナがトーンの見るとなりその目に軽蔑の色を浮かべ、ミンスは見向きもしなかった。予想通りの反応だった。

ミンスがウィンドに向かって口を開いた。

「リードの居場所がわかったのか？」

状況がひどく切迫したものだという事を容易に感じさせる口調だった。

よく見ると目の周りに何日も寝ていないかのようにくまができあがっていた。

ビーナはまだ元気そうだったが、疲れているのは目に見えて明らかだった。

「ああ、当然だ。それよりも……二人だけなのか？」

ミンスがあごでさした方向にトーンも視線を移すと、リラのあった地下に続く空洞から男がでてこようとしているのが見えた。

近づいてくるにつれてはつきりとしてくる輪郭に、

トーンは自分の目を疑わずにはいられず、胸が高鳴るのを抑えることもできなかった。

「よう、元気そうじゃねえか」

トーンは男に勢いよく抱きついた。
まさか、生きていたなんて！

サンザは苦しそうに、でもどこか照れくさそうにいった。

「痛え、痛えよ。まだ傷は治っちゃいねえんだから、もっと大事に扱ってくれ」

体を離し、小さい頃から何度も見てきた男の顔を、まじまじと確かめるように見つめた。

額の中心に豆粒でも入っているかのようないぼに、長さが揃えられた形のいいあごひげ。紛れもない、サンザの顔だった。

「もうずっと会えないと思ってたのに……」

溢れてくる感情が邪魔してなかなか声にならなかったが、小さい頃にもしてくれたように、サンザは全てをわかっていているような顔でにっこりと笑い、

トーンをぎゅっと抱きしめた。

温かくてちよつとおう体は、トーンに昔のことを思い出させ、冷たくなった心を温めてくれるように感じた。

「そう簡単に死んでたまるか。

わしは岩よりも頑丈なんだ。

それにトーン、お土産もあるぞ」

そういつてサンザが取り出したものを受け取って、トーンは目を大きく見開いた。

手のひらに置かれたのは、なんと壊れたはずのオカリだったのだ。しかしよく見ると、模様や吹き口の形がちよつと違っていて、表面にはまだささくれがたくさん残っている。

「これ、どうして……」

サンザはビオラの木を指さしていった。

「あの立派な木が、お前に贈り物をしたいといっけてきてな。今さっき急ごしらえで作ったものだから形はいびつだが、十分満足のいく音がでるはずだ」

トーンは驚いてビオラの木を見つめた。

サンザが木の声を聞くことができるのは、ずっと前から知っている。だから何をいいたいのか、トーンにはすぐ理解できた。このオカリナはビオラの一部であり、そのものなのだ。

「さて、行くか」

二人のやりとりを眺めていたウィンドが口を開いた。

「どうやってリードを探すつもりですか？」

トーンの質問を予測していたのか、ウィンドはあらかじめ考えておいたかのように答えた。

「心配ない。」

大陸中に空高く舞う風が、私たちを彼の元へ導いてくれる」

行動を始めて間もない内に、

トーンはウィンドのいつていた言葉の意味を理解することとなった。リードが矢継ぎ早にミンスに行く道を指示している。

たまに窓をあけて風をあおぐように全身に風を浴びたかと思うと、

再びミンスに指示を投げている。

ウィンドは風の音を聞いて、リードの向かった先を追っていたのだ。

「私はまだ、あなたを許したわけではありませんから」

隣に座っていたビーナが突然口を開いた。

「ウィンドさんがあなたを連れて行くといい、ミンス隊長がそれを承諾した。」

二人が何を考えているのかは分かりませんが、私はあなたと一緒にいるだけで嫌気がさします。

もしおかしな行動をとれば、今度は引き金を引くのをためらったりはしません」

当然の叱責だった。

しかしだからといって、もうそれを恐れる気持ちはなかった。実際リードを止めることも、

ウィンドに付いていくことも正しいことかどうかわからなかったが、ビオラの流した涙を見て、

音楽によって壊されていく大好きだったはずのダイヤグラム大陸を見て、

このまま放っておくことだけは正しくないと感じていた。

責任は取らなければいけない。

ビオラのためでも、誰かのためでもなく、自分自身のために。

トーンは外を眺めた。

まるで早送りされているかのように景色が後ろへ流れていく。
その遠くには、太く長い蔓が大地を切り裂く爪痕のように、まがまがしく残されていた。

車は一向に止まる気配を見せず、逆に速度を上げていく。

道に倒れていた細い木に乗り上げて激しい衝撃が車を襲ったが、
ミンスはそれをもとめせずにアクセルを踏んだ。

外が徐々に見慣れた風景へと変わっていく。

しばらくして、トーンははっとした。

地面には緑の絨毯が敷かれ、
大陸を分断するかのように流れる川は今にもそのせせらぎが聞こえてくるように輝き、
あちこちにのびる木々には色とりどりの果実が実りの時期を迎えている……。

「さあ、着いたぞ」

ミンスが川縁に車を止めた。

そこは、トーンが大切な人と一緒に何度もオカリナの練習をした、
メトラの川縁だった。

「なんでこんなところに……」

トーンは胸が押しつぶされるような思いだった。

ここには楽しい思い出以上に、悲しい思い出が詰まった場所だった。

「わざわざ送ってくれてすまないな。」

トーン、わしは一足先にフルートさんのところに戻っているぞ」

サンザはそういつて、一人町の方角へと歩き始めた。

トーンはウィンドを見たが、ウィンドは何も答えずにその逆の方角へ向かって歩き始めた。

ミンスも、ビーナもその後続く。

ビオラが頭の痛みを訴えて気を失った、あの川の下流へと向かって……。

下り坂の最後の角を曲がると、その先には紛れもない、リードの姿があった。

川の流れをずっと眺めたまま、近づいていくトーンたちに振り向くそぶりも見せない。

リードは川を眺めたまま口を開いた。

「待ってたよ。」

すっかり元通りになった空気の調律が、役に立ったんじゃないかな？」

「ああ、十分くらいだ。」

おかげでこうやってお前を止めにくることができた」

リードはふふつと笑ってから、さびしそうな声で答えた。

「ウィンドはすっかり変わってしまったね」

「変わってしまったのはお前だ。」

あれほど音楽を愛していたお前は、もうどこにもいなくなってしまった」

「僕は何も変わってない。

変わったのは君たちの方だよ。

音楽を愛しているからこそ、それを壊した機械が許せないんじゃないか。

ダイヤグラム大陸を復活させてくれた恩も忘れて機械を作り出した。

苦しむ者の気持ちなど何も考えずに、

いざ自分たちが苦しめばさも音楽が悪者だともいうように責め立てる。

元々の世界を壊したのは機械だ。

音楽の世界に無断で入りこみ、世界を壊していったのは機械を作り出した人間たちだ。

僕はただ、元の世界を取り戻そうとしているだけに過ぎない」

リードが全員を睨み付ける。

そこには殺意さえ感じられた。

トーンはリードと目が合った瞬間、きつと睨み返した。

一瞬寂しそうな表情を浮かべたが、すぐに元の表情に戻っていた。

「貴様がしているのは、ただの殺戮じゃないか！」

ビーナが叫ぶ。

しかしリードは動じず、吐き捨てるようにいった。

「君たちの使う機械が僕たちに与えた苦しみに比べれば、ずっとましさ」

今度はミンスが口を開いた。

「確かに、私たちは機械の利便性におごり、

人の苦しみや環境の変化に気付きもしないままそれに依存していた。

お前のおかげで、過ちに気付くことができた。
それには本当に感謝している。

だが全てを壊さずとも、お互いが共存して生きていく方法があるはずだと私は思う。

これまでの君の行動は、単なる傲慢に過ぎないと思うが？」

「機械なんてなくても、人は十分に生きていくことができる。
彼がその身をもって体験してるはずさ」

彼、という言葉にトーンは胸がつまるような思いだった。
リードにとっては、もう自分は仲間ではなく敵なのだと、
はつきり突きつけられたような気分だった。

「人間が機械を作ったんじゃない。
機械が人間に作らせたんだ。

楽になる、便利になるという甘いささやき声に、人間は利用されているんだよ。

一度染まってしまうばもう忘れることはできない。

今がまさにそうじゃないか。

共存だって？

笑わせないでよ。

今は仲間のような顔をしていても、すぐに裏切るのは目に見えている。

音楽があっても、楽には生きられないだろうからね」

三人とも、返す言葉が見つからなかった。

誰も何もいわないのを見て、リードは話を続けた。
視線は、トーンに向けられていた。

「何が正しいか、これでわかったんじゃない？
物は考え次第だよ。

音楽は人を殺してるんじゃない。
人を教導してるんだ。

実際彼女のいった通り、音楽があつたおかげで人々は身の危険に
気付くことができた。

今回のことを教訓にし、人々はこう思うはずだ。
機械は破滅を呼ぶ悪魔の化身だってね」

「確かに、そうかもしれない……」

トーンは静かな口調でいった。

リードの視線を真つ正面で受け止めながら。

「でも、それでも、僕はビオラを信じることにしたんだ。
オカリナを君にじゃなく、僕に渡したという事実を」

一瞬、リードがぴくりと反応したように見えた。

「ビオラがいった。

機械が大事な人がいれば、音楽が大事な人だっている。

大事なものを奪う事なんてできないから、

私は機械と音楽が共存できればいいと思ってるって。

初めは単なる世迷い言だと思ってた。

でも今は違う。

彼女がオカリナを渡してくれたのも、

その可能性を見出して欲しかったからなんだと思ってる。

今回のことで、大陸の人々もきつと一緒に探してくれるはずだ。
共存できる、誰もが幸せになれる方法を」

リードは鼻で笑い、あざけるようにいった。

「さっきいったばかりじゃないか。

機械がある限り、人は欲望に負ける」

「それは以前のように何も知らなかった場合だ。

今はみんなが、リードのおかげで機械の持つ危険性に気付いてる」

少しの沈黙が辺りを包み込む。あのとときと変わらない川のせせらぎだけが響いていた。

先に口を開いたのはリードだった。

「……わかったよ」

それはこれまで聞いたどれ声よりも重く、悲しい響きだった。

「僕も、その限りなくばかげた考えに賭けてみることにする」

ウィンドとミンスが信じられないというような表情を浮かべ、ビーナはいぶかしげな表情を浮かべたが、

トーンはそれを言葉通りに受け止め、表情が明るくなった。

「それじゃあ……」

「うん。もう何もしない」

前に見たときと同じにつこりとした笑顔が、リードの顔に浮かび上がっていた。

「一つだけ、お願いがあるんだけど……」

「なに？」

「リラを、預かっていてほしいんだ。

他の誰でもなく、トーン、君に」

そういつて、リードがリラを差し出した。

トーンは少しの間悩んでいたが、やがてゆっくりと歩み寄り、リラに手を伸ばした。

しかし次の瞬間、リードはトーンの腕を掴んで引き寄せ、

ミンスとビーナがとっさに取り出した銃の盾になるように構えた。

リラの音に対抗できるようウィンドがホルンを取り出す。

トーンは腕を取られ身動きができなかった。

「一体何を」

トーンの言葉をさえぎるようにしてリードはいった。

「わかってない。

わかってないんだよ！

音楽さえあればみんな幸せだったじゃないか。

好きな楽器を持ち寄って、音楽を奏でて、聞いて、

それだけで毎日充実していたじゃないか！

それを全部、機械が粉々にしていったんだよ？

僕は絶対に許さない。

家族を殺した機械も、のうのうと生きる人間も絶対に」

まるで悲痛な叫び声だった。

リードが片方の手でリラの弦をはじいた。

ウィンドも同時にホルンを奏でたが、リラの力はその比ではなかった。

地面から飛び出した二本の蔓がミンスとビーナの持っていた銃を奪い取り、

同時に横殴りに二人を突き飛ばす。

風の微妙な変化に気付いたウィンドも逃げだそうとするが一步遅く、頭上から振り下ろされた枝に巻き付かれて身動きが取れなくなった。

トーンはただそれを眺めていることしかできなかった。

すぐ近くにリラがあるというのに、

奪うことも、演奏を止めさせることもすらもできなかった。

トーンはしばらくだすようにして声を出した。

「こんなこと、もうやめようよ……」

ウィンドの悲鳴が聞こえてくる。

遠くに横たわっているミンスとビーナも、生きているかどうかかわからなかった。

何もできない自分が悔しかった。

音楽を守ると誓ったのに、リードに二度も騙され、

結局いいように扱われているだけじゃないか。

見慣れたはずの景色は、みるみるうちに植物だらけの景色へと変わっていく。

水の透き通ったきれいな川は伸びきった雑草によって隠れ、

あの時座っていた形の整った石にはあちこちに苔が生え始めていた。

思い出が壊れていく……そう思うと、涙が溢れて仕方がなかった。音楽を守れないだけでなく、ピアノさえも自分は守れないのだろうか……。

そう思ったとき、トーンの耳に突然聞き覚えのある音楽が聞こえてきた。

リードも異変に気付いたのか、演奏を止めてその音に耳を傾けた。聞き間違えるはずがないと思いながらも、トーンは信じることができなかった。

その音はトーンのポケット、オカリナがしまつてある場所から聞こえてきたのだから。

「なんで君まで、僕の邪魔をするんだ……」

リードの言葉は、トーンではなくオカリナそのものに向けられているようだった。

突然鋭い爆発音のようなものが聞こえたかと思うと、何かがトーンの頬をかすめていった。捕まれていた腕がふっと自由になる。その後ろで、どさりと何かが倒れる音が聞こえた。

リードが肩を押さえながら地面でもだえている。

服には真っ赤な血がにじみだしていた。

トーンがすぐ傍にリラが落ちているのを発見し拾い上げようするが、リードの繰り出した蹴りによって吹き飛ばされてしまう。

再び鋭い爆発音が響いたかと思うと、

リードは体を大きくのけぞらせながら地面に倒れていった。

音がした方を振り向くと、

そこには落としたはずの銃を構えたビーナの姿があった。

トーンは今度はしっかりとリラを拾い上げた。

見た目よりもずっと重たいように感じたのは、きつとリラの重さだけではないからなのだろう。顔を上げると、茂みの先に近づいてくるウィンドの姿が見えた。後ろを振り返ると、すぐ傍まで来ているビーナの後ろに、立ち上がるうとしているミンスの姿も見えた。みんな無事なようだ。

リードの傍で足を止めたビーナを見て、

トーンはぎょつとして二人の間に割り込んだ。

一瞬でも間違えれば、トーンのお腹に風穴が一つ出来上がっていたかもしれない。

だがビーナはもともと引き金を引くつもりはなかったのか、構えていた銃を地面に落とし、全てが終わったことを知って声を上げて泣いた。

しかしトーンが振り向いたときには、

もうそこからリードの姿はなくなっていた。

大陸の半分近くが植物によって破壊された大地の真ん中で、

二人の吟遊詩人はそれぞれの楽器で音楽を奏でた。

あちこちに広がった植物には色とりどりの花が咲き乱れ、

葉のささやく声が耳に届いてくる。

木々の氾濫から逃げ出していた動物たちが流れてくる音楽に惹かれるように戻ってきて、

空に浮かぶ大きな太陽が全てを祝福するようにと照り輝いていた。

ウィンドが口を開いた。

「リラはどうするんだ？」

トーンも同じことを考えていた。
きつと誰もが、これを壊すことを望んでいるだろう。

「僕が持っていたんだけど、いいかな。
リードは、血の繋がっている人であればリラの力を扱うことができる
といったた。

だから心配はないと思うんだ」

周りから反論が上がってこないことを確認して、みんなの代弁を
するようにいった。

「いいんじゃないか。

君に演奏してもらえれば、ビオラも、リードも本望だろう」

ミンスが誰にいうでもなくいった。

「機械に依存する生活はこれからもきつとなくなることはないだろ
う。

そんな中でも、これから誰もが自由に美しい音楽を奏でられるよ
うに、

機械と音楽が共に仲良く暮らしていけるよう、考えていかないと
いけない。

再び私たちが盲目になった時は、リラの音楽を聞かせにきてほし
い。

そうして道を踏み外すことなく、お互いに歩んで行けばいいと
思っ

「リードを撃ったとき……」

ずっと考え事をしていたビーナが口を開いた。

「私の心の中に、彼の苦しみや痛みが入ってくるのを感じました。リラは、その気持ちを他のみんなにも伝えられる楽器だと思っています」

トーンは両手に抱えたリラを見下ろした。

胸にすっぽり隠れてしまいそうなほどに小さなその楽器は、様々なものを失って一からの出発となった今のダイヤグラム大陸や人間たちの姿を表しているように見えた。

弦をはじけば聞き入ってしまいそうなほど美しい音が放たれる。

壊れてしまった様々なものを元に戻すのにも、音楽と機械が共存していく方法を考え出すことにも時間はかかるかもしれないが、

こんなに小さな楽器でも人を魅了させる力を持っているんだ。

この大陸に住む人々が、人同士でなく大陸とも心を一つにして取り組んでいけば、

いつかきつとたどり着けるはずだ。

トーンはリラを足下にそつと置いてからサンザの作ってくれたオカリナを取り出し、ふっと吹いてみた。

音にあわせるようにリラからも音が放たれる。

それはまるで、ビオラとリードが一緒に歌っているかのようなだった。

リードは最後の力を振り絞って森へと戻り、その後動物たちに連れられて、

トーンと二人で過ごしたあの二つの切り株が並ぶ場所に横たわった。もう一人で立ち上がる体力は残されていない。

肩と右胸から、少しずつリードの命がこぼれ落ちていた。

トーンの座っていた切り株の前に、砕けたオカリナの破片が飛び散っている。

「ビオラ……僕は君を救うことができたかな。

彼と一緒にいたいという願いを、叶えてあげられたのかな……」

薄れゆく意識の中で、どこからオカリナの音楽が聞こえてきたような気がした。

そして、あの音楽に嫉妬していた自分に気付いた。

涙を流したのは、母が死んだとき以来かも知れない。

もっと早く彼と知り合っていれば、自分は違う道を歩むことができたろうか……。

「君みたいに……なりたかった」

安らかな顔で、リードは動物たちに見守られる中、息を引き取った。

五年後、少しずつ世界に活気が戻り、植物によって破壊された区域にも、

再び人が住みつくようになった。

しかし、決して無駄に自然の資源を削るうとはせず、人々も前のような技術だらけの、機械にまみれた世界を望もうとはせず、

質素な生活を求めるようになった。

自然が怖くなったのかも知れない。

また仕返しがまっているかもしれないと。

だが理由はどうかあれ、おかげで質素な生活でも十分に幸せに生きていけることに、

全員が気づき始めていた。

心地良い空気の流れ、風の匂い、太陽の恵み……そして何より、木々や動物、虫が奏でる自然の音楽は、いつまでも耳に残り、荒んだ心を洗い流してくれた。

機械はなくなることはなかった。

しかし、人々は機械に音楽を取り込み、音楽による空気調律の回復を同時に行うことで、

自然と上手く付き合っていく方法を発見したのである。

トーンは今日も、いつものようにビオラの木の下でオカリナを吹いていた。

枝にとまいった小鳥がさえずり、

さわやかな風がトーンの頬をなでて木の葉っぱを揺らして去っていく。

心地良い自然の香りが辺りを包み込んでいる。

その足下で、オカリナの音に呼応するようにリラが音を奏でていた。

「君にも見せてあげたかったな。ここからの風景を」

時の経過のせいか、ピアノの口元が微笑んでいるかのように変化していた。

だがそれに、トーンは気付くことはなかった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0183e/>

音楽を奏でて

2010年10月10日15時18分発行